
名探偵魔女

愛華哀歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵魔女

【NNコード】

N4167X

【作者名】

愛華哀歌

【あらすじ】

野田縁は普通の高校生……とはすこし違う。だが決して彼自身が特別というわけではない。ただ状況が特殊なだけ。

彼の先輩には魔女がいる。それも飛び切り性質の悪い奴だ。

今日もいつもどおり部活をしていると魔女である道絵梨紗から明日部活の交流会に参加する事を聞かされる。でも縁はまったく乗り気にならない。

何故なら彼は明日交流会で人が死ぬのを知っているから。

一章 目的（1）（前書き）

電撃の一次で落ちた作品です。個人としてはミステリーとして書いたつもりですが人によってはミステリーと思えないかもしれません。

一章 目的（1）

はつきり言おう。僕にとってこの物語の目標は既に九割方終了している。

これはそのたつた一割で人が死んでしまう物語だ。

ぶつちやけ言うと殺人事件が起きるのは予想出来ていた。
先輩の事だ、きっとコレぐらいの出来事じゃないと刺激が足りない
のだろう。

ボーッと立つていると美奈は急に僕の腕にしがみ付いてきた。
ああ、そう言えば美奈は死体を見る事が始めてなのか。
僕は僕で死体を見るのは一度目だけどやっぱり死体つて言うのは
どうも慣れない。なんだか気分も悪くなつてきた。

犯人はどうせ……と言つか絶対に先輩だ。

まったく、なんで此処まで感情が歪んでいるのか理解しがたい。
やはり永遠と続く歳月が先輩を狂わせてしまったのだろうか？
いや、そんな事を考えても無駄だな、起こつてしまつた事は仕方
が無い。

死体には無数に刺した後があつた。左胸にも刺し傷があるからこれが致命傷だろうか？

刺し傷良く見るとその部分から赤いものがドクドクと流れ出していく。

「レではまるで赤い池だ。

「…………」

考へても無駄だと分かつてゐる。分かつてゐるのに……。

「……ほんと」

どうしてこんな事になつてしまつたのだろうか。

それはいつも通りの平穩な日々。

時間を作り戻してから一ヶ月程が経過し、いつの間にやら「ホール

デンウイークの初日だった。

僕がいつも通り幼馴染の小山美奈と部活の為に美術室で絵を描いている時、部長のが言った。

「いきなりだけど、明日。隣町の高校の美術部と交流会をします。

集合時間は九時、現地集合だからそこ所よろしくね」

そのいきなりの要求に美奈は嫌な顔一つしないで従つ。

「わかりました、先輩！」

その元気の良い返事に先輩は目を細くし微笑む、そしてその細い

目のまま、先輩は僕を見た。

「で、野田君はどうなの？」

「あ……」

僕には拒否権はない。

先輩は魔法使いだ。何をされるか分かつたものではない。

「……行きます」

「そう」

先輩は上唇を舐め、口を二三回の様にしてもう一度微笑む。

「それに伴つて私が一昨日書き上げた作品は明日行く予定の高校に送つといたから」

「…………！」

送つたのかよ。

「あら？ 如何したの、野田君。顔色が悪いわね」

「…………そりや、そうでしょう」

先輩の嫌がらせと来たら吐き気がする。あの絵を送つただつて？
勘弁してくれ。

「そんなにあの絵が不満なのかしら、それともアレは野田君のお気に入りか何かだったの？」

お気に入りか、たしかに綺麗な絵だった。多分僕なんかよりもずっと上手い絵だ。でもそれは表面の美しさ、裏面は
「たしかに先輩の描いた絵、素敵だった。良いなー。あたしもアレ

ぐらい上手く描ける様になりたい」

そう言つて美奈は赤いフレームのメガネをグイッと上げた。

メガネのフレームが赤つて事は美奈の調子が良いつて事だ。コイツはその日の調子でメガネを変えてくるからな。

「大丈夫よ、練習すればアレぐらいい描ける様になるわ」

「そりかなー」

美奈が首を傾げる。

……まったく、くだらない。

僕達みたいに『三年絵を練習した程度であれ程描ける訳が無いじゃないか。どうせ、数十年越しで練習したのだろう。先輩には腐るほど時間があるのでから。

「そう言えば、縁もいきなり絵が上手くなつたよね？」

「え……ああ、気のせいだろ？」

美奈のいきなりの言葉に少し焦つた。まあ、僕も人の事が言えた義理では無い。僕も先輩と同様に時を戻したのだから。

これは、人生の中で置いて最大のズルだろう。

そう思つているからこそ。僕は余計に美奈を意識してしまつ。中学生の時から伸ばし続けて、セミロング位になつている髪をツインテールにした美奈は何度も見てきた。何度も見てきたのに、どうして今はこれ程までに魅力的に見えてしまうのだろうか。

美奈はそこまで目立つタイプでは無く、派手なタイプでもない。どちらかと言えば地味だ。それに美奈よりも可愛いと思う女の子だつてクラスにはそこそこいる。

だが決して美奈が可愛くない訳では無い。しかし『美少女か?』と問われると首を傾げてしまう。そんな奴。

そして、そんな奴の幼馴染が僕。

……何だか僕と美奈が釣り合つてているのだが釣り合つていないので、良くわからないな。

「それにしても明日が楽しみねえ。交流会なんて何ヶ月ぶりかしら?」

先輩は何時の間にか窓際に移動し、空を仰ぎ見ながら呟いていた。きつとこの人が楽しみにしている事は交流会自体ではなく、交流会の際に起きる出来事が楽しみなのだろう。

なにせこの人は名探偵魔女だからな。

名探偵と言うものは実際、とても大変だ。

どの物語でも名探偵は確実に事件に巻き込まれる。それも殺人事件とか、その類の凶悪な事件だ。

その強制発生イベントを自力で解き明かさなければならない。まあ、名探偵と言う位のだから謎を解き明かすのは朝飯前だろう。でも、どんな名探偵だろうが事件を起こさない様にする事は出来ないので。それが名探偵の最大の弱点。

しかし、今僕の視界に入っている、名探偵はそれが出来る。

先輩……道絵梨紗には人から狂気を取り除く事が出来る力がある。

狂気と言うのは、まあ、殺人衝動とか欲望とか人の暗い部分の事だな。

されど彼女は名探偵なのだ。名探偵である以上、事件を解決しなくていけない。だからあえて逆の行動をする。狂気を取り除く事が出来るのならば逆も然りって奴だ。

先輩は名探偵と言う役柄を演じる為に、人に狂気を植え付ける。彼女には狂気を取り除くと同様に凶器を植え付ける力もあるのだ。しかも、その方法がまさに美術部独特の方法で、先輩らしいと言えば先輩らしいのかも知れない。

その方法とは先輩が描いた絵を見る。たったそれだけの事である。

ただ見るのでは無く、彼女が絵に魔法を掛けた後に見る。するとランダムでその絵を見た人間を狂気に変えてしまうと言うとんでも設定。これには個人差があるらしく、魔法の体制的な物が全く無い人だと、本当に性質の悪い殺人鬼になってしまうとか。

以上、これが魔法使いの道絵梨紗、美術部の先輩、名探偵の魔女。全てをひっくるめた彼女の素性である。

……きっと先輩も自分自身が狂氣そのものになつてゐる事は分かつてゐるのだろう。分かつてゐるのに止められないのだ、きっと。

その日の部活帰りは美奈と一緒に帰る事にした。いや、むしろいつも一緒に帰つてゐるのだけれど。

美奈から少し遅れる様にして生徒玄関から出ると美奈は一コロと軽く笑う。

「じゃ、行こつか

「…………ああ

僕と美奈はゆっくりと歩き出す。

僕は前に比べて美奈と会話する事がへタクソになつた気がする。時を戻してから少し美奈を意識しすぎているのかも。

余り意識しそぎると変に思われてしまうかも。

しかし、意識せざには要られない。何せ美奈が最大の目的で時を戻したのだから。

「ちょっとコンビニに寄りたいんだけど良い?」

「いいぞ」

僕は適当に返事をして肯いた。

「ありがと」

「おう」

僕と美奈はコンビニの方向へ向う。

短い会話。でもコレはいつも通りの事だからたいした気にならな
い。

コンビニに着くと美奈は即行で漫畫本が並んでいるコーナーへ向
かつた。

「今日は発売日だからね」

そう言つて美奈が手に取つたのは週間で出でている漫畫雑誌。

「……なあ、毎週それ買つてゐるけど、お金大丈夫なのか?」

心配したつもりで聞いた。が、

「もう！ 漫画家田指す物が漫画を買うお金を惜しんでいられる訳無いでしょ！？ その所を縁は全然分かつて無いよ！」
いや、怒られる様な事を言つた記憶は無いぞ、って言つたからそこでムキになるなよ。

「じゃあ、読み終わつたら次僕に貸してくれ」

すると美奈は顔をひそめながらも、ため息を吐き答えた。

「りょうかい。明日貸してあげるわ」

「ども」

僕だつて漫画は読む、むしろ大好きなんぐらいだ。『漫画家ぐらい』絵が上手くなりたい』って理由で美術部なんかに入つたぐらいだし。美奈が漫画雑誌を片手に他のものには田もくれず、即行でレジに向かう。

よくよく考えて見ると漫画家つて凄いよな。物語と絵を描くこと両方をしているんだから、普通の精神力じゃ出来ない事だと僕は思う。大体僕には物事を継続させる力は余り無い。一番続いているのが美術部の活動で絵を描くことぐらいだ、勉強をすれば五分と経たずやる気を無くすし、夏休み中のラジオ体操なんて一回やつただけで心が折れた。

そんな僕でもしつかりとやり直したい事が在るのだ。

「何ボーッとしているの？ 早く行こ」

「あ……」

いつの間にやら会計を済ませていた美奈が漫画雑誌の入ったレジ袋を片手に僕の前に立つていた。

「悪い、考え方していた」

美奈は眉毛をグイッと上げる。

「変な事じやないでしょ！？」

「まさか、そんな事言つていないで早く行こうぜ」

僕はそう言い、美奈を放置して一人コンビニから出る。

「ちょっと待ちなさいよ！」

美奈が物凄い勢いでコンビニから出て、レジ袋をブンブン振りな

がら僕を追いかけてくる。

美奈は今、僕を僕だけを見ている。 そう思つと途轍もなく嬉しかった。

美奈を家まで送つた後、僕は特に何処かへ寄るつもりもなかつたので自宅に向かつて歩いていた。 さすがに一度目の高校一年生なんだ、ここで失敗する訳にはいかない。 每日しっかりと美奈を家まで送る事にしているのだ。 しかし、僕と美奈の家は近い訳では無いのでコレが案外きつかつたりする。

でも、あんな辛い思いをするぐらいうらば僕は美奈を家まで送る選択をするけれど。

「ふー」

結構な距離を歩いているので足が少しダルイ。 每日同じ距離を歩いているのに足は全然なれていない様だ。

ノロノロ歩きながらどうにか家までたどり着くと家の前には見覚えのある女人がタバコを吸いながら立っていた。

女人は此方に気付くと、左手を振つてくる。

「やあ、少年。 一週間ぶりかな？」

「なんの用ですか？」

「いやあ、いつもお宅の部長さんにお世話になつていてお礼を言いに来ただけさ」

「だったら本人に言つてくださいよ。 大体彼方がそんな理由でここまで来る人じゃないって事ぐらい僕でも分かります」

「ま、たしかに他の様があるから来たんだけどね」

そう言いながら持ち歩き用の灰皿にタバコを入れる。 この人の名前は櫻庭彩子、 警官だ。

きつと一週間前に起きた事件関わりでここに来たのに違いない。

「で、その後お一人さんはどーよ？」

「どうよつて、何がですか？」

「何事も無く過ごせているかつて話」

そう言いながら櫻庭さんは頭を搔く。

何事も無く、ね。残念ながら明日変なイベントの予約が入つていいから無理だな。どうせ、ろくでも無いイベントだし。

僕が黙り込んでいると櫻庭さんは片手を閉じてウインクをしているみたいな感じで言った。

「なに、特にコレと入った問題が無ければ良いのさ。大体私が危険視しているアンタじゃなくて部長さんなんだからね」

「……何故ですか？」

分かりきっているのにあえて聞いてみた。それはきっと櫻庭さんがどんなリアクションを取るのか気になつただけだ。それ以外の理由はない。

櫻庭さんはハッと笑い答える。

「君も分かりきっている事を聞くね、部長……道絵梨紗ちゃん。どう考へても事件に巻き込まれる回数とその事件を自分で解決する回数が多すぎるだろ？ それにあの雰囲気、普通殺人事件とかに巻き込まれてあそこまで冷静になれる女の子は余り居ないと思ってね」

確かにその通りだ、一年前の先輩は良く知らないけど、先輩の所為で僕は既に一つ事件に巻き込まれた。おかげ様でトラウマになりそうだよ。

「彼女は本当の意味で名探偵って事なのか、または……魔女とか？」

そう言つてニヤニヤしながら櫻庭さんはポケットからタバコをもう一本取り出し、火を付けて口にくわえる。

……名探偵と魔女。どちらにせよ先輩に当てはまる言葉だ。まあ僕は名探偵魔女って事にしているけれど。

「もしも、魔女の方だつたら此方も仕事の関係で黙つていられない訳ね。あーやだやだ時給は変わらないのに仕事が増えるなんて目眩がする」

たしかに給料が変わらないのに仕事が増えるなんてテンションが下がる事以外の何物でもない。まあ、それを堂々高校生の前で言う

警察官もどうかと思うが、それも櫻庭さんらしいと言えば櫻庭さんらしいな。僕だったら特別何か得する様な事が無いと面倒臭い事なんてしたくない。ぶっちゃけ明日の交流会なんてサボりたいぐらいだ。でもサボればきっと先輩は黙つていらないだろう、最悪の場合、美奈を狂気に変えかねない。

櫻庭さんは煙を吐き出し、片方の手をポケットに入れる。

「あ、そう言えば最近となり町で行方不明になつている男子高校生がいるんだけど、知つてる?」

行方不明？ 初耳だ。

「いや、まったく知りませんでした」

「そうか……それなら良い。それじゃあ、私は帰るわ。あんたも殺人事件には気を付けてね」

あたかも僕がこれから殺人事件に巻き込まれる事を知つてている様な台詞を残し、櫻庭さんは一人早歩きで去つていった。

結局なんの用で来たんだ、あの人。

そう、思いながらも僕は一週間前の事件を思い返す。

あれは夜の出来事だった。何故か僕は十時を回つてているのに物凄くお腹が減つてコンビニにパンでも買いに行こうと家から出た時だ。家の前にヒーロー者の仮面を付け、右手に竹刀を持つて立っていた。

僕がそいつに襲われた事を知つたのは竹刀で顔面を殴られて視界が五十度程回転した後である。あっさり氣絶させられた僕は町外れの小屋みたいな所に手足を拘束されて閉じ込められ、口をガムテープで止められた。

気がついた時は本当に気が滅入つたなあ。「冗談じゃ無いって思った。本当に殺されてしまうのではないかと思った。

まあ、その後先輩が小屋まで来てくれて助かったのだけれど、今考えてみれば僕を閉じ込めた犯人も先輩によつて狂氣化された被害者つて事だな。

結局、全て先輩が悪い。

どうにか、犯人捕まえたけど結構犠牲者とか出ていたみたいだし……。

きっと先輩は本当に人の命を軽く捉えている様だ。

「僕も美奈も、何時先輩に飽きられて狂気にされるか分かったんじゃないな」

そう、此處で一番回避する事は、僕。または美奈が先輩に狂気されてしまう事だ。僕が狂気になれば多分美奈を殺すし、美奈が狂気になれば僕を殺しに掛かる。核心は無いけど先輩ならばそう言う展開にしてくるはずだ。だから、僕は絶対に先輩に飽きられてはいけない。

僕は人をまだ殺したくない。

もちろん美奈が人を殺している所なんて持つてのほかだ。もしそうなつたら僕は人生を捨てる覚悟で先輩を殺しに掛かるだろう。

自分に人を殺せる覚悟が有ればの話だけど。

はたして僕には人を殺せる度胸、もしくは覚悟があるのだろうか?

「…………ないな」

そう呟いて玄関扉を開け、家に入った。

一章 目的（2）

風呂から上がつてアイスを頬張るのはいつもの事だけど、風呂から上がりていきなり誰かと話したいと思つたのは初めてだったかも知れない。

どうも明日の事ばかり考えてしまい既に気疲れを感じてしまふようだ。だからきっと誰かから安らぎを貰いたいのだろう。そういう場合はやはり女の子と会話するのが一番だ。

とは言つても僕の携帯に入っている女の子の携帯番号は美奈と先輩だけだ。どうも女の子との交流は苦手で何を話せば良いか分からぬ。しかも僕はイケている男子でも無いので女の子の携帯番号を入手するのは困難を極めるだろつ。

別に欲しいとも思わないけれども。

結果電話を掛けた相手は美奈。先輩に電話を掛けた所で余計に疲れるだけだ。あの人は癒しを貰えるといつよりも苦痛を貰ってくる人だからなあ。

携帯で「ホールをすること」、一回、二回、三回、四、五、六、七…

もしかすると出ないのでと焦りながらも九回目のホールで美奈が出た。

『もしもし、縁どうしたの？』

電話に出てくれた事にホッと胸を撫で下ろしながら答える。

「いや、余りに暇だつたから」

癒して欲しくて。なんて言える訳がない。そんな事を言えば羞恥で死んでしまうかも。

美奈は『はは』と軽く笑う。

『縁がそんな理由で電話かけてくるなんてね。思つんだけど最近縁はやたらあたしに構つてくれるよね？』

ギクリとした。確かに構いまくつていい。でもそうしなければ誰

かに美奈を奪われそうで怖いのだ。

僕は心拍数を抑えようと必死になりながら喋る。

「違うよ、やる事無いからお前に構つてているだけだ」

『またまたあ、寂しかったんでしょ？ もう少し素直になりなさい』

お母さんかお前は。

「そんな事より、今お前はなにしてるんだ？」

話を逸らす為に別の話を振つてみた。美奈は基本突つ込んだ話はしないので、この手は良く使う。

『今？ 今は風呂上がつて部屋に戻つてきたばかりだよ？』

「……へー」だから、電話に出るのが遅かつたのか「俺も丁度風

呂から上がつたばかりだ」

『ふーん……縁つていつもお風呂入る長さつてどれ位？』

「ん？ 風呂に入っている時間？ それってお湯に使つている時間の事か？」

『違うわよ。髪とか洗うのも全部含めての時間』

……全部含めてか。実際に計つた事とか無いからよく分からないな。大体計つた奴とかいるのか？ いや、世界の何処かに居る

だろうな。きっと。

「大体……一十五分ぐらい。かな？」

大体と言つたが、完全適当に答えた。だつて分からないものは分からぬ。

『男の人つてそれぐらいか。あたしの場合は四十分ぐらい掛かる』

「ちょ、四十分も風呂で何しているんだよ？」

『あたしはアンタと違つて、髪が少し長いから頭を洗うのも大変だし、お湯には長く浸かりたいタイプなの』

ああ、なるほど。それなら納得だ。僕だつてお湯に長く浸かりたい時はある。そう言えば最近温泉とか行つた事ないな。行ける暇があつたら行きたいけど、行ける暇は……ないな。

「あんまり長く浸かるとのぼせるんじゃ無いのか？」

『慣れればいける』

「…………」「慣れってなんだ？』

でも一度だけ、温泉で粘つて一時間ぐらい浸かっていたらのぼせて気持ち悪くなつたんだよな。おかげでコーヒー牛乳飲めなかつた。まあ、どうでも良いけど。

『かるーくのぼせた後のアイスがたまらないのよ』

結果のぼせているのかよ。まあ、アイスは美味しいけどさ。大体のぼせたら食べ物食べる気分じゃなくなるだろ？……までよ。アイスとかスーツとしたものだつたら食べなくなつてもおかしくないのか？もしも僕がのぼせたとしてアイスが目の前にあつたとしたら

『そう言えば縁はどうじて明日の交流会が嫌なの？』

「えつ」

『何よ、とぼけるつもり？ あたしでも縁が交流会に行くのを嫌がつている事ぐらい分かるわ』

「…………」

とぼけるつもりは無いが、相変わらず勘の鋭い奴だなあ。いや僕が単純だから分かり易いだけなのか？確かに僕は直ぐ態度で表す所があるからそう思われても不思議ではない。

『ちょっと黙つてないで何か喋つてよ。もしかして今まで期限悪くした？』

「あ、いや。機嫌は悪くしていないよ。まあ交流会に行くのが面倒臭いんだ。知らない人と関わるのは得意じゃないし」

すると美奈は『ふふっ』と笑る。

『たしかに縁は初対面の人と話すのヘタクソだもんね。ま、明日はあたしが付いているから大丈夫よ』

「ああ、ありがとう」

『つて言うか話し始めたばつかだけどそろそろ髪を乾かしたいから通話を止めて良い？ 放置しておくと変な癖が付いて直すの大変なのよ』

「別に良いぞ」

『うん、せっかく掛けてくれたのにごめんね、じゃ』

そう言ひつと美奈は通話を躊躇う事なく切つた。僕の耳にツーッーと通話が終わった事を示す音が入り込む。

「大丈夫なものか」

僕はそう一人で呟いた。

明日の交流会。美奈だけは絶対に参加などさせたくなかつた。無理にでも休んで欲しく位だ。だつて狂気に染まつた人間が最低一人はいるんだぜ？ そんな危険な場所に行かせたい訳無いじゃないか。でも、時間は確実に明日へ向けて進行する。

……たぶん明日一人は死ぬな。

そんな予想をしたくも無いのにしてしまつた。まるで自分が人の死に少しづつ慣れているみたいで気持ち悪くなる。

先輩に突き合わされていれば何時か慣れてしまうのだろうか？ 何とも思わなくなつてしまふのだろうか？ それともそれが快樂になつてしまふのか？

「ありえない よな？」

そう言うのは先輩の様に無限の時間が手に入つた場合だろう。あの人の場合自殺すれば簡単にリセット出来るだからいくらでもやり直しは利く。

「それが魔法使いの最大のメリットであり、デメリットである。か別に魔法使いがうらやましいとは思わない。むしろ魔法使いなんぞなりたくない。普通で良い、普通に生きて普通に恋をしたいんだ。でも、たしか誰かが言つていたなあ。

普通ほど難しいものは無い。と、
たしかにその通りかも知れない。

次の日。僕と美奈は同じバスで隣町の高校へ向かつていた。

美奈は僕の隣で窓際の席に座りずっと外を眺めている。ちなみにメガネのフレームは白だ。白と言う事は余り調子が優れていないら

しい。

僕も調子は優れていない。だってこれから人が死ぬ場所へ向かうようなものだから調子が良い訳がないのだ。

「はあ」

僕がため息を付いて俯くと視界の左側に美奈の太股が入り込んだ。少し地味目の美奈でも制服のスカートは結構短い。美奈はなかなか魅力的な太股をしており、どうしてもそこに目がいってしまう。

僕も男だな。

実際に触つてみたくなる程に美奈の太股から魅力は感じたのは初めてだった。きっと柔らかいのだろう。サラサラしているのである。しかしながらここで触つて美奈との関係を壊す積もりは無い。そんな事をしてしまっては全てが水の泡だ。

だから、今は美奈を眺めるだけで我慢しよう。

そう思つて顔を上げると偶然にも美奈と目が合つた。

「なに?」

太股を見ているのは駄目だと思つたから顔を上げると偶然目が合つた。なんて口が裂けても言えない。

「いや、今日のフレームが白だから、なんか嫌な事でもあったのかなーつて思つただけ」

そう言つと美奈はおでこに手を当てて顔をしかめた。

「なんと言つか。妙な気分なんだよね。別に嫌な事とかがあつた訳でもないのに気分が全然上がらない。それに朝から背筋が寒いというか、体を上手く動かせないような寒気がする」

まるで、これから危険な事が起きるのを察知している様な物言いだな。しかし、本当に起きてしまうのだから仕方がない。

……果たして仕方ないで済ませて良いのか?

先輩を止めるだけ、それだけで防げる事なのにそれが出来ない僕は……。

「…………うう」

こんな事を考えるのは止めよう。どうせ考えた所で僕に先輩を止

める度胸など無い。

考えれば考える程、自分を追い詰めて苦しくするだけだ。

「あ、そう言えば先輩はどうしたのかな。このバスに乗っていないつて事は自家用車?」

「ああ、それなら朝連絡が来て、私は部長だから一本先のバスに乗つて交流会の準備を手伝つて言つてたな」

美奈が首を傾げて不満そうな態度を取る。

「え、どうやつて先輩から連絡受けたの?」

「え、ああ。いや」しました。余計な事を言つたか?

どうも美奈は自分が知らない間に僕が他の女人と連絡を取り合つていたら機嫌が悪くなるんだよな。一度へそを曲げるとなかなか機嫌が直らないし。

今、思えばそれは美奈が僕の事を思つているからこんな態度を取つてくれているんだよな。昔の僕はそれに全く気付けなくて、ウザツたく思つていた程だ。

「ごめん。美奈が知らない内に先輩とメアドと携帯番号を交換した」素直に頭を下げた。美奈に謝つたのは久しぶりつと言つ程では無いけど、ここはしつかり誤つておこひ。その方が楽だし、自分の為にもなる。

頭を上げると美奈が引き気味になつて驚いた顔をしていた。

「ど、どうしたの? やけに……素直……」

裏目に出てしまつた様だ。逆に引いてくる。けど怒らせるようマシ……だな。

「別に、美奈が気にしているみたいだから謝つただけだよ。僕は素直なんかじやない」

「何そのシンデレみたいな態度は……ヒロインでも狙つているの? ヒロイン? 僕が? あり得ない。と言つかあつて欲しくない。ヒロインねえ」

僕は意味も無く手の平を見た。相変わらず生命線が短い、頭脳線も長いわけじやない。テレビでよく手相の番組がやつているけど、

そういう番組で僕が唯一見つけたのは性欲がズバ抜けて強いつとやうものだった。正直ふざけるなと思った。

用は性欲が強い男のヒロインを求める人物の趣味は大体特定されるから、僕的には願い下げという訳だ。

「なあ、美奈は漫画家目指しているんだろ?」

美奈は窓際に肘を着いて外を眺めながら答える。

「そただけどうかしたの?」

「いや、物語を書く際に主人公を男にしたとしたら、ヒロインは飛びつきり可愛い子を描くのかなーって思つただけ」

「うーん……あたしの場合可愛いヒロインと言うよりカツコいいヒロインを描くタイプだからなあ。あの一緒に戦つてくれる頼りがないのあるヒロイン。それに今まで描いてきた物語の大体は主人公よりヒロインが強い設定だね」

なるほど。ヒロインが敵ボコボコにして、ここぞと言つときに主人公が活躍する。見たいな話か。僕も嫌いじゃないけどな、そういう物語。

「じゃあ縁に聞くけど主人公はヘタレタイプが好き? それとも強い系?」

「強い系かな?」

ヘタレだとまるで自分を見ているみたいで嫌だ。いや、実際僕はヘタレ主人公以下だ。本当に何一つ行動を起こせない。

「強い系か。あたしはヘタレの方が好きかな? 強いヒロインがヘタレ主人公を救うなんて見ていてたまらない」

「ふーん」

やつぱりこういう話になると美奈は急に熱が入るな。さすが漫画家を目指しているだけある。

そう、感心しながら美奈の話を聞いていると、美奈は急に落ち込んだような顔をして、俯いた。

「でも、漫画業界で厳しいのよね。あたしみたいな実力じゃ足元にも及ばない」

僕はそんな美奈を見ていられず、田を逸らしながら肩に手を置いた。

「まあ、自分の夢が簡単に叶うんじゃつまらないだろ？ むしろ難しい夢があるって良い事だと僕は思う」

僕は自分が絶対にそう思えない様な言葉を平氣で美奈にかけていた。

それでも、美奈は笑って言うんだ「ありがとう」て。

そして僕は「別に良いよ」て、答える。

ああ、僕はまた自分に嘘をついてしまった。

そんな後悔をしながら僕も外の風景を見ようと窓に視線を移した時であった。

「おーい、前のお一人さん。もしかして西高の美術部員かい？」

少し高めの声が後ろから聞こえてくる。

僕と美奈が同時に後ろを振り返ると、そこには髪をポニー・テールにし、目がパツチリとした女の人が僕達の座席に手を付いて此方に乗り出していた。雰囲気的には年上に思える。

美奈はその女人に礼儀正しく挨拶する。

「はい、西口高校美術部の小山美奈と申します。あのー、どちら様ですか？」

女人人はニコッり笑い自己紹介を始めた。

「ワタシの名前は多野田志乃得たのたしのえ、北口高校美術部部長さ。その様子からすると今日の交流会に誘われたの？」

「はい、そうです」

「やっぱりそうだと思つた。それにしても東高の部長さんも生きな事を考えるね、交流会とは確かに他校の人があ書いた絵は気になるのは納得できる。ワタシだって一度で良いから見てみたいと思つていた矢先にこの企画が来たもんだからビックリしたよー。まあ、ここで出会えたのも何かの縁だから仲良くしましょー！」

「あ、はい。よろしくお願ひします」

そう言い美奈は座りながら礼をした。

よく初対面の人っこまで口が回るものだ。ある意味才能だな。余りの口数の多さに美奈も圧倒されているみたいだ。

「それにしてもさー、北高から東高つてやたら遠いんだよねー、おかげ様で休日なのに六時起きになっちゃった。凄く眠くて今にも寝ちゃう。でも、交流会が楽しみだから眠気なんか吹っ飛ばしていこーみたいなね」

「は、はあ」

「そう言えば君達は絵を描き始めてどれ位なの？ ちなみにワタシは三年目！ 入つてある程度まではすぐ上達するけど、そこから進歩するのが大変なんだよねー。ワタシなんか一向に上手くなる気配ないし、でも描かなきゃ上手くならないし、やっぱり積み重ねって大切って事かな？」

「…………」

向こうが質問したのにその後の話が長くて質問に答えられねえ。
「あ。でもさ、いくらやっても上手くならないものってあるよね。人間って結構才能で左右されやすいから、大した努力もしていないのに大物になれる人もいれば努力しまくっても未だ報われない人とかも大勢いるしね。ワタシが思うに人間誰でも何かの才能を持つている。でも、大体の人物は自分の才能に気付けないで死んでしまう。みたいな人が多いんじゃないのかなーって思っているんだ」

「そ、そなんですか」

美奈もこのマシンガントークにたじたじのようだ。てかこの人、ほつといったらずつと一人で喋っているんじゃないのか？

バスの中で大きい声で喋り続ける志乃徳さんは明らかに周りから浮いていたが、そんな事を気にする様子も無く喋り続ける。

「あ、そういうえばさー。ワタシの後輩の池田つて奴がいるんだけどね。そいつが東高へは自家用車で行くつて言つたから、ワタシも一緒に乗せてつて頼んだら。先輩は色んな意味で無理ですつて言われたの。ちょっと酷くない？ 一応ワタシ先輩だよ？」

いやあ。多分その池田とか言う奴は自分の自家用車に彼方を乗せ

ると確実に彼方一人で喋りすぎるので嫌だつたんぢゃないのでしょうか？　と心の中で呟く。

僕が呆れながらも志乃得さんを眺めていると、志乃得さんは急にハツとした顔になり僕と美奈を交互に見た。

「ところです。お一人さんどちらが北高の部長さん？」

志乃得さんにしては凄く短い言葉だった。

「あの、部長は一本先にバスで東高校に行っちゃつたんですね」

美奈の丁寧な説明に志乃得さんは「ああ、なつとく」と言つてワザとらしく右手で握り拳を作り、それを振り下ろして左手に当て、その後直ぐに気まずそうな顔をした。

「あちやー、そっちの部長さんが早く行つたのならワタシも早く行けばよかつた」

きつとこの人が早く来てしまつたら、東高の美術部員はマシンガントークの餌食になつていただろうなあ。

志乃得さんに気を使つたのか美奈が声を掛ける。

「交流会の開始時刻は九時過ぎですし、遅刻した所で美術部員以外に美術室を使う人なんて普通いませんから時間は余り気にしなくても大丈夫だと思いますよ？」

すると、志乃得さんは指を立てて左右に振りながら舌を鳴らした。「ぶつちやけ言うと今日の楽しみで交流会は一番手なんだよね、さて。ここで問題！　今田ワタシが一番楽しみにしている事はなんでしょう…ヒント、あなた達の部長」

「…………」

ほんと元気な人だな。いや、元気すぎる。

「こーら、無言にならない！　ワザワザこの暇なバス時間を利用して問題をだしたのだからしつかり答えなさい！　あ、あと一人で相談してもオッケー」

はあ……まあ、実際相談するまでも無い。うちの部長に関わりなのならばほぼ確実にアレだな。

「先輩、名探偵道絵梨紗を一日で良いから見てみたい、または先輩

と一緒にいると高確率で何かしらの事件に巻き込まれるから、自分も事件に巻き込まれたい。のどちらかって所ですかね？」

志乃得さんが田を見開いて僕を見る。とっても大きな田だつた。

「ほうほう、少年。どちらも正解だ。一度で良いからあの名探偵を拝見してみたかつた。で、運が良い…………うん。運が悪ければ事件に巻き込まれる予定なの」

運が悪ければ、ね。あの人と関わっていたら運が良くても事件に巻き込まれてしまう。

「じゃあきっと、今日は志乃得さんにとって最高の厄日になります

よ

「ちよ、縁！ 何失礼なこと言つているのよー。」

志乃得さんは無表情ながらも田が明らかに笑っている感じで言った。

「良い厄日になると良いわね」「なんだか波乱の予感がする。

一章 目的（3）

バスから降りて歩く事五分で東口高校に到着した。

ちなみに僕と志乃得さんはあれから一言も会話をしていない。でも変にギクシャクした感じはしないからきっと大丈夫だろう。

校門通りぬけを高校に敷地内に入る。校門には宮殿とかについていそつな檻つぽい扉が付けられていて、後は三メートルはあるう壇で校舎は囲まれていた。

東高には時を戻す前に一度、今みたいに交流会で着たことがある。でもその時、北高は交流会に参加していなかつたはずだ。やはり先輩の言うとおり、まき戻した時間には誤差が生じるのか。

生徒玄関に入り、元々持つてきておいた上履きに履き替える。

「ワタシこの学校に入るの初めてなんだけど、お一人さんは美術室の場所分かるの？ 言つとくけど知りませんとは言わせない」

じゃあ本当に美術室の行き方が分からなかつたらどう答えれば良いんだよ。

「いや、僕知つているから大丈夫ですよ」

「えつ？ 縁この学校來たことあるの？」

「来たことあると言えばあるし、無いといえば無い

「何、その曖昧な答え」

そんな、疑いの目をされても、実際にそうなのだからこれ以上どう説明すれば良いか分からない。

美奈の視線を気にしつつ美術室へと向かう。前にも思つたがこの東高は西高と違つて何かと豪華な氣がするな。なんというか全体的に広い。学校全体は圧倒的に広いし、廊下も少し広めだ。僕の記憶が正しければ美術室も西高に比べて約一・五倍は広かつたはず。

田舎者の僕にとっては実際の所、この学校が大きいのか僕が通っている高校が小さいだけなのか良くわからない。これは悪魔で僕からの視線で大きく感じるだけだから、実際は普通の大きさなのかも。

生徒玄関から続いている廊下をまっすぐに歩いていくと体育間の扉から右方向に廊下は続いている。その先に進んだ場所に美術室はあつた。

どうやら僕の記憶力も捨てたものではないらしい。

「少年、ここが美術室かい？ もしそうならばこの学校相当裕福だとワタシは推測するけど、そちらさんはどう思つ？」

「多分裕福な学校なんぢやないんでしょうか？」

そう適当に答えて僕は美術室の扉を開けた。

美術室には夥しい量の絵がズラッと並べられており、どれもコレも途轍もなく綺麗で纖細な美しさを漂わせていた。そして、部屋の真ん中当たりにあるテーブルを囲む様に座っている三人が此方に視線を向ける。

「あら、野田君。思つたより早く着たわね」

「…………」

すでに分かつてていると思うが座っている三人の内一人は先輩だ。残りの二人は多分この高校の生徒だと思われる。

一人は短髪で頭に可愛らしいリボンを付けている女人。もう一人は目つきが悪く余り人を寄せ付けない様な雰囲気を出している男人だった。

テーブルの上には先輩が書いた絵が置かれており、どうやら三人でその絵を見ていた様だ。

女人の方が言う。

「えつと、道さんの後輩さんですか？」

「ええ、そうよ。男の子の方が、野田縁、女の子の方が小山美奈よ」とすると女人の方は立ち上がり一步前に出てお辞儀をした。

「はじめまして、東高美術部部長の佐井光^{さいひかり}と申します。せつかくの交流会ですので仲良くしましょうね」

「よ、よろしくお願ひします」

美奈は何だか慣れない様子でお辞儀をした。これは……まあ、僕のお辞儀をするべきなんだろうな。

「よろしくお願ひします」軽くお辞儀。

光さんは可愛らしい笑みを見せて手招きをする。

「立っているのもなんですから、どうぞ此方にして腰掛けてください」

……魅力的な人だ。

僕はこのたつた数秒間のやり取りでそう思った。僕の勘が外れていなければきっと五回は別々の男子に告白された事がある筈だ（もちろんその全てを断る）ある意味、女性から妬まれるタイプの女性だな。

僕と美奈は光さんに吸い込まれる様にテーブルの所まで移動し近くにある椅子に腰を下ろした。右隣に美奈、左隣に先輩が座つていると言う形だ。

テーブルを挟んでほぼ僕の正面に座つている光さんが言つ。

「野田さんも小山さんも余り緊張せずリラックスなさつて結構ですからね」

「はあ、どうも」「お気遣いありがとうございます」

僕は思つた。

こういう人に限つて、心の闇は大きい。

もしかすると今回に狂氣になるのはこの人かも知れない。と、

いや、偏見でものを思いすぎだな。実際は本当に心が綺麗な妖精っぽいという可能性も無い訳では無い。人の内面ほど詠みにくいものは無いからな。

僕が一人でそう納得していると突如後ろから奇声が沸きあがつた。「あんたらワタシを無視するなあアアアアアアああああああああああああああああああ！」

奇声のような声で叫んだのはもちろん志乃得さんだつた。どうやら仲間はずれにされた事が相当気に食わなかつたらしい。それにしても非常に不快な気分になる叫び声だな。「ワタシは！？ ワタシの自己紹介は何処に行つたの！？ 部長の癖に一番来るのが遅かつたからワタシをいじめているの！？」

なんだか面倒臭い事を言い出したぞ。変に被害妄想が膨らまなければ良いが。志乃得さんは見た光さんはガタツといきなり椅子から立ち上がって、驚いている様な顔をした。

「えつと……道さんの後輩さんですか？」

「違うわ、見た事も無い」

「ひど！？」

たしかに酷い。志乃得さんは確かにウザイかも知れないけど、先輩の扱いは酷い。本当に酷い。「ワタシは北口高校の美術部部長よ！」

すると光さんはハツとした顔になつた。

「あ、そういうえば北口高校も誘つていたんでした！ 完全に忘れてました、すいませんね」 うわあ。

もしかしてこの人天然なのか？

「酷い！ 誘つといて忘れるなんて酷すぎるよ！ 佐井さんとやらあー！」

でも、志乃得さんのテンションを見る限りでは問題なさそうだ。と思つてしまつた。と言つつかウザさに磨きが掛かっているのは気のせいだろ？

「取り敢えず自己紹介お願ひしますね」

志乃得さんのウザい行動に対しても笑みを崩す事ない光さんは大人だなあ。

「うい、ワタシは多野田志乃得、北口高校の美術部部長、趣味はペン回し、本業は絵描きさん、そういうれば北口高校を誘つた事を忘れていたつて事はまだ池田は来ていなか……まったくけしからんおい、自己紹介のはずが後半全然違つ事行つてるぞこの人。

「多野田さんですね。どうぞこちらにお座りください」

「おお、すまんね」

途轍もなく丁寧な光さんと途轍もなくガサツな志乃得さん。なんだか対照的で見ていて結構面白く感じるぞ。

僕が光さんと志乃得さんを見ていると、光さんの隣に座る田つき

の悪い男がいきなり立ち上がった。

それにより回りの皆は一斉に視線を男の方へ向ける。

そんな状況に彼は焦ることなく口を開いた。「…………篠崎敬、副部

長だ」 それだけ言って男は座つた。

まさかこのタイミングで強引に自己紹介してくるとは思わなかつた。

なんだか篠崎さんだけ、回りとは少し違う感じがするな。さきほどから何が起きても全く動じた様子を見せないし、無表情だ。きっと元々顔に出さない人なんだろう。

「大体の人はそろいましたね……ええと人数的に後お一人でしょうか？」 光さんが言う。

後お一人つて事は今回の交流会、南口高校は参加しないって事か。志乃得さんが軽く舌打ちをする。

「池田の奴め、もう少しで遅刻だぞ……もし遅れてきたら叱つてやらないと……」 ああ、そうか。後一人つて多分志乃得さんの後輩の池田つて奴か。

僕が意味無く志乃得さんを眺めていたら左隣に座る先輩が話しかけてきた。「ねえ、野田君。なかなか個性的なメンバーがそろつたと思わない？」

「…………」

個性的、か。たしかに無表情な奴もいればマシンガントークをする人や丁寧な人もいる。個性的といえば個性的かもしねり。

先輩は目を細めて言う。

「誰が……狂氣になるのかしら?」「誰、でしょうね」 知りたくも無い。「安心しなさい。野田君と美奈ちゃんは狂気にならない用に細工しておいたから、犯人は今日ここで今テーブルに置いてある私の絵を見た人間よ」

「そいつはどうも」

たぶん先輩の事だから嘘はついていないと思う。

実は先輩の絵には人間一人を狂氣にする力しか無いらしいので、

犯人は一人、共犯は無しだ。それに突発的に人を殺そうと思うのではなく、少しづつ体に毒が回るよう心が狂気に染まつっていくそういうから。犯人になった人間はある程度冷静に行動してくる。まったく、やっかいな魔法だ。

取り敢えずここですべき事は絶対に美奈に単独行動をさせない事だ。いや、僕が付いていない状態で行動させる事は絶対にさせていいけない。はつきり先輩の絵を見た時点ですでにここにいる人達は美奈以外信用する事ができない。できるはずが無い。

「美奈」

呼んだつもりは無かつたのだけれど、名前を呟いた事により美奈は髪を揺らしながら此方を見る。「ん、なに?」「勝手に何処かへ行くなよ」

「なによ、急に。変なの」

「わるかったな」

くそ、ワザワザ心配してやっているのになんて奴だ。

まあ、仕方ないか。これから誰かが殺されるなんて僕と先輩しか知らない事だし、そんな事を言った所で信じてくれる人なんているはずが無い。

「それにしても、綺麗な絵ですね」光さんが言った。

そんな絵に注目を集めるのは正直簡便してほしい。綺麗な絵だが僕は見たくもないね。

「なんというか、色合いが独特ですよね。私にはとても出来ない。はない美しさを漂わせいる気がします」「

はかない美しさねえ。僕は絵を描く事は好きだけど。芸術とかそういう言つのは良く分からんんだよな。実際名のある芸術家の絵を見て、凄いとは思うけど感動まではしない。

「うわー本当だ。すげー、これは普通の上手さじゃないね。なんとどうか才能? センス? またはそれらと違う何か? 取り敢えず常人の腕じやないね。それに相当細かい。ワタシなんて色は基本的に適当に塗っちゃうから絶対描けないね。これ何処かの賞にでも出

したら受賞するぐらい上手いとワタシは思うよ

志乃得さんのマシンガントークを始めた。まいったな、ここのい
る人達じやきっと付いていけないぞ。大体志乃得さんは言いたい事
を一気に言いすぎなんだ。もう少し分割して話せれば相当喋りが上
手い人になるとと思う。

「しかもさ、この絵の大きさね、大きすぎず小さすぎないこの大き
さが何とも言えない魅力を生み出している、それに何より見やすい。
変に激しい色合いじゃないからとっても見やすいんだよ。たまに激
しい色を使いすぎて目がチカチカする作品とかあるじゃん。ワタシ
はああ言うのはちょっと、と言つたか凄く嫌いだね」

志乃得さんは皆が困っているが分からぬ様だ。いや、困ってい
るのは分かつていてが喋る事を我慢できないだけなのか？
ホントに、まったく。やれやれ……だ。

ようやく志乃得さんのマシンガントークが収まったのは時刻が十
時過ぎになつてからだった。

もちろんこの場に居る人々は志乃得さんが喋つている間、得に何
かする訳でもなく、ただただマシンガントークに圧倒されるだけで
あつた。

志乃得さんの喋りが収まった後は光さんが「皆さん個人個人で絵
を描いて見せ合いましょう、お題は『春』です」と言った事をきっ
かけに皆は個人で絵を描く事になつたのだが僕や美奈、志乃得さん
と先輩は絵を描くための道具を持ってきていなかつたので光さんが
学校に置いてある道具を貸してもらい描く事に。

まあ貸してくれたと言つても、絵を描くためのキャンバスとそれ
を立てる為のイーゼル、あとは鉛筆である。色を付ける時間は無い
ので下書きが出来上がつた程度で良いらしい。

僕は鉛筆をキャンバスに走らせながら回りを見た。

「うわあ

光さんは細かさ、志乃得さんは描くスピードが以上に突出されているようで上手かった、そして何より篠崎さんの絵の描き方が恐ろしく独特で、普通ならば何度も線を入れて形や立体感を出す所をほとんど一筆描きの様に描いて見事に『春』を表現し始めている。僕も一度時をまき戻しているから前より絵が上手くなっているはずなのだが、全然敵う気がしない。

少しショックを受けながら僕は自分の絵に集中する為目の前のキャンバスに視線を移す。するとある事に気づいた。

そう言えば、前にこの高校の交流会に参加した時の部長は光さんじゃなかつたはずだ、大体副部長が篠崎さんでもなかつた気がする。たしか……男の部長で……。駄目だ、思い出せない。

記憶に霧が掛かつた様な感覚にイライラしていると志乃得さんがぼやいた。

「あー、つーか。今日池田は完全に遅刻だな。いやむしろ来ないかもしねれない。もし来なかつたら退部にしてやるアイツ」

そんなアッサリ退部つて、確かに遅刻したり来なかつたりしたらそいつが悪いけどワザワザ退部にするのはちょっと可愛そうな気がする。

僕は横目で美奈を見る。

なんだか必死にキャンバスに向かっているなあ。多分回りの人達の絵が上手いから焦つているんだろう。事実、凄く困った顔をしている。

……もう少しじだけ美奈を眺めてこよ。

そう思つた途端である。

美奈と目が合つた。

「なに?」

「いや、なんでもない」

少し焦つたので、急いでキャンバスに向かい絵を描く作業にもどつた。

ああ、もう少しじだけ眺めていたかつたんだけどな。ちょっと残念。

「…………うお！？」

作業に戻つて十秒も経たない内にいきなり僕の携帯がなつた。しまつた。マナーモードにする事をすっかり忘れていた。

回りを気にしながら僕は急いで携帯をポケットから取り出して液晶を確認する。単なる登録サイトからのメールだつた。くそ、タイミングが悪すぎだつーの。

急いで携帯をマナーモードにしてポケットにしまつと篠崎さんが「あ」と声を上げた。

「そう言えば、携帯を教室に忘れた」

そう言い残し、篠崎さんは美術室から出て行つた、多分忘れた携帯を取りに行つたのだろう。

それと同時に光さんが席を立つた。

「すいません、ちょっとお手洗いに行つてきますね」

「あ、あの！」

美奈が物凄い速さで立ち上がる。

「あたしも付いていいって良いですか！？」

どうやら美奈トイレをずっと我慢していた様だ。そりや初めて来る所ならトイレの場所なんて分からないし美奈の性格からして光さんと共にトイレの場所を聞く事も気が引けていたのだろう。

光さんは美奈に対して微笑む。

「大丈夫ですよ、分からぬ事があつたら気にせず私に聞いてくださいね」

「は、はい」

美奈は顔を真つ赤にしながら光さんと共に美術室から出て行つた。急に人が減つたな。

そう思い、美術室を見渡していると志乃徳さんが一ニヤニヤしながら此方を見ていた。

「なんですか？」

「いや、なんだかね。いつも急に人が少なくなると事件が起こるんじゃないかと思って」

その志乃得さんの言葉に反応する様に先輩が体を反転させてキャンバスから志乃得さんに体を向ける。

「それは、それは私からすれば血が騒ぐわね」

「やっぱり名探偵って呼ばれているだけあって、そう言つタイプな道さんは？」

「そうね、私は一つの事件を解決する事で最高のカタルシスを得る事が出来る、だから事件が起ると楽しくて仕方ないわ」「ほうほう、楽しそうだね。ワタシも混ぜて欲しいぐらい」「じゃあ、もし事件が起きたのならば一緒に推理でもしまじょうか？」

「あ、良いねそれ。物凄く楽しそうー。」

まったく、血の氣が多い人達は嫌いだ。今回の起きるイベントは何だか荒れそうだぞ。

「もちろん野田君も参加してくれるわよね？」

先輩は僕に乾いた笑顔を向ける。

「…………どうでしょうね」

茶を濁す感じに答えておいた。絶対に先輩の推理「ひたすら付き合わされる事が分かつていても素直に『はい』と答える事だけは絶対したくない。

「そう言えば今日の交流会って何時までを予定してるの？ ワタシ全然分からんんだけど」

何時まで交流会をするの聞いていないなあ。結構長い時間のような気がするけど。

志乃得さんの質問に先輩が答える。

「たしか十一時までじゃなかつたかしら？ まあ回りの反応しだいでは引き伸ばして良いらしいけど

「ああ、だったら事件が起きるまで引き伸ばしてくれるとありがたい！」

僕は全然ありがたくない。

「ま、私がいるのならば何時何処で事件が起きてもおかしくないわ

ね。私、相当事件に好かれているみたいだし。ま、私自身もそう言う出来事が大好きだけど」

「うう。わくわくする。ワタシもそう言つ体質にならないかな？」

毎日エキサイティングに生きる事が出来そう

「そう？ 私の中ではそう言つ爆発した様な楽しみではなくて、冷ややかに淡々と樂しつて感じの毎日なのよね」

「それでも良いじゃん楽しいのならさー。ワタシなんて毎日退屈に暮らしているだけよ？ その内急げ者にでもなつてしまふかも知れない」

志乃得さんは「はあ」とため息を付いて窓から外を眺める。

「とんでもない事件おきないかな～」

すると先輩は「ふふ」と笑い近くのテーブルに頬杖をした。

「でも私並に事件に巻き込まれ続けたら警察に疑われ始めるのよ。

最近は事件を解決した後の事情聴取が長くて長くて参ったわ」

たしかに。前回の事件も僕は直ぐに終わつた事情聴取が先輩だけやたらと長かつた。やはり櫻庭さんは先輩を怪しんでいる様だ。でも

でも、警察なんかでは先輩を止める事なんて出来ない。この人はすでに人間を超えた力を身に付けているのだから。

先輩は言葉を付け足す。

「まあ、事情聴取されるつて言うスリルも嫌いではないのだけれどね」

その台詞を聞いた瞬間、志乃得さんの目つきが変わつた。

「スリルね……じゃあやつぱり 今まで道さんが関わつた事件は全て、道さんが引き起こしたつて事？」

先輩は無表情で喋らない。

「だつて、わざわざ事情聴取でスリルを感じるつて事はスリルを感じてしまう様な事をしたつて事よね？ スリルを感じてしまう事つてやっぱり悪い事なのかな？」

すると、先輩いきなりギリギリと歯軋りをならして目つきを鋭い

刃のように変化させて志乃得さんをにらみつけた。

「あてずっぽうで言つたつもりだけど、当たり？」

「………… わあ、どうでしょう？』

………… めずらしい。

先輩がここまで憤慨するなんて滅多にない。きっと一般の人の隙を見せてしまい、そこ見事に付かれた事に苛立つているんだ。どうも先輩は人を見下す傾向があるからな。

「………… ずっと絵を見ていたから少し疲れたわね。ちょっと外の空気を吸つてくるわ」

そう言つて席を立ち足早に美術室から先輩は出て行つた。

志乃得さんは僕「えへへ」と笑いかけてくる。

「なんだか少年の先輩を怒らせてしまった様だね」

「あのー、先輩を怒らせると後々厄介ですよ。執念深い人です」「なーに、大丈夫だつて。あの人は普段は冷静そうだけど一度でもその冷静をぶち壊されたら何も出来なくなるタイプだよきっと、大体すこし自分の力みたいなものに自惚れている感じがビンビンするね。自惚れは自分を何時か陥れる。まあ、エンターテイナーとかの場合自惚れ位が丁度良いと思うけどね。だつて自分の力を信じないと人を楽しませる事なんて出来ないもん。でも道さんは違う自分を樂しませる為の自惚れは意味をなさない。まあ、分かりきつた様な事を言つているワタシも少し自分に酔つている所はあるけどね」

自分に酔う、か。僕は多分そんな事ないだろう。第一に僕は自分が大嫌いだからな。

「ところでさ、少年も何か道さんについて色々知つているじゃないの？」

「えっ？」

「だって、道さんに対する時だけ回りと少し態度が違うよね。なんて言つてか怯えているつて言うのかな？」

「………… 僕は答えない。

志乃得さんは自分の頭を搔いて怪訝そうな態度を取る。

「まあ、答えたくないのなら答えなく良いッス。尋問するのはワタシの柄じゃないし」

少しホッとした。多分問い合わせられたのならば吐いていたか、この場から逃げ出していたがどちらかだろう。それにしても志乃得さんがここまで鋭い人とは思わなかつた。

もしかすると今回の事件、先輩が解決する前にこの人が解決してしまうのんぢやないのか？

まあ、この人が狂気に染まつていなければ話だけど。
そう思つた時だつた。

「いやああああ！」

近くで高く透き通つた様な叫び声が上がつた。

この声は 美奈？

何時立ち上がつたのか、何時美術室から出たのか分からなかつた。
ただただ急いでいた。急いで廊下に出たんだ。
すると長い廊下で僕と対向になるように立ち尽くす光さんと崩れ落ちる美奈がいた。

そして僕と二人の間に挟まれる様にしていたのは。
壁に赤いものを飛び散らせている物体。いや、物体ではない。人か。

体重を滅多刺しにされて血の池を作つて死体。

それだけならまだ良い。それだけじゃない。

最大の問題は

その死体の人は見覚えの無い男の人だつた。

一章 仮面の下の狂氣（1）

僕は取り敢えず死体を恐る恐る横切つて美奈と光さんの所に向かつた。

光は立つてはいるものの放心状態。美奈はへたり込んで泣きじやくつている。

「よくまあこんなにするまで……」

ぶつちやけ言うと殺人事件が起きるのは予想出来ていた。
先輩の事だ、きっとコレぐらいの出来事じゃないと刺激が足りないのだろう。

ボーッと立つていると美奈は急に僕の腕にしがみ付いてきた。ああ、そう言えば美奈は死体を見る事が始めてなのか。

僕は僕で死体を見るのは一度だけどやっぱり死体つて言つのはどうも慣れない。なんだか気分も悪くなってきた。

犯人はどうせ……と言つたか絶対に先輩だ。

まったく、なんで此処まで感情が歪んでいるのか理解しがたい。やはり永遠と続く歳月が先輩を狂わせてしまったのだろうか？
いや、そんな事を考えても無駄だな、起こってしまった事は仕方が無い。

死体には無数に刺した後があつた。左胸にも刺し傷があるからこれが致命傷だろうか？

刺し傷良く見るとその部分から赤いものがドクドクと流れ出している。

コレではまるで赤い池だ。

「…………」

考へても無駄だと分かつてゐる。分かつてゐるのに……。

「……ほんと」

どうしてこんな事になつてしまつたのだろうか。

僕は何をすれば良いのか分からずただ死体を見ながら立ち尽くし

ていると美術室から志乃得さんが出てきた。

「え

志乃得さんは死体を見てちょっと驚いた後に死体の近くまで移動し、しゃがみ込んだ。

「……池田？」

……池田？ 池田って志乃得さんの後輩だったよな。じゃあ目の前で死んでいるのはその池田なのか。

志乃得さんは泣き叫ぶ事も取り乱す事も無く立ち上がり頭を抱える。

「……だれよ。こんな事したの」

先輩だ。先輩しかいないだろう。

志乃得さんは顔を上げて喋りだす。

「これは警察に連絡した方が良さそうね……少年、ワタシ携帯を持つていなかから代わりに掛けてくれない？」

「はい」

僕は携帯を取り出すそつとポケットを探りながら思つた。

なんだ、あの志乃得さんの妙な落ち着きは、目の前で死んでいるのは自分の後輩なんだぞ。普通はもっと落ち着きの無い態度になるはずだ。

ポケットから携帯を取り出し、110番にコールする。

「あれ？」

『ただいま電波が届かない場所にいます』
と、言う事は

僕は急いで携帯の液晶を見た。

「……………圈外、です」

「えつ？」

先輩め、魔法で何か細工をしたな。

「う……じ、じゃああたしの……携帯は？」

美奈が泣きながらそう言い僕に携帯を差し出してきた。

女の子の携帯を見る事は少し抵抗があるけれど、この際仕方ない。

もしかすると僕の携帯が壊れているだけかも知れないし。

そんな淡い希望を持ちながら僕はおそるおそる美奈の携帯を開き電波状況を確認した。

「…………くそ」

やはり圈外。どうあがいても文明の力では魔法に適わないようだ。
「だめ……だつたの？」

鼻をヒクつかせながら涙目で僕を見上げる美奈を見るとどうしても心が痛んだ。

「ごめん」

「縁は、悪く……ないよ」

「ごめん」

どうしても謝る事しか出来なかつた。やっぱり昨日を無理やりにでも来させない方が僕にとつても、美奈にとつても良かつたんだ。それなのに僕は。

「携帯が無理なら取り敢えず皆を美術室に集めた方が良さそうね。でもどうやって皆を集めれば……え？」

志乃得さんが突如表情を変えて、驚愕の顔をする。

そして、物凄い勢いで叫んだ。

「少年！ 後ろお！」

それに反応して僕が反射的に振り返ると物凄いスピードで接近する黒い何か。

人だ。ただの人じやない。顔には般若の仮面、後はただ全身が黒尽くめ、両手には刃渡り二十センチ程のナイフ。その片方は 真っ赤だつた。

本能的に、流れ的に僕は光さんの手と美奈の手を思いつきり引つ張り、美術室に向かって思いつきり走つた。志乃得さんは一味先に美術室の扉を開いて何かを叫びながら手招きをしていく。

くそ、光さんも美奈も死体を横切るのが怖いのか、全然走らうとしない。これじゃあ追いつかれる。

焦りながら後ろを見ると黒尽くめはすでに僕の背後でナイフを振

り上げていた。

刺される。

そう思つた刹那。

「しゃがめええええええ！」

志乃得さんが叫びながら美術室の椅子を片手に振りかぶついていた。僕は強引に前かがみに倒れる様、重心を移動させ手を掴んだ二人の体を無理やり倒させた。倒れると同時に僕達の頭上を椅子が通過して

「　っ！？」黒尽くめの奴に命中した。

「今のうちに早く！」

僕は急いで立ち上がり、一人を無理やり立たせ、黒尽くめが怯んでいる内に一人をほぼ引きずる様な形で美術室に逃げ込んだ。

「閉めるわよ！」

美術室に入ると同時に志乃得さんが扉をしめてガチャリと鍵を掛けた。が、

パンツと何かはじけ飛ぶ音がした。

「　っ！」

黒尽くめの奴はナイフで扉のガラス部分を叩き割った様だ。コレでは美術室に侵入されてしまう。

「少年、ちょっと手伝え！　撃退するよ！」

志乃得さんは近くにあつたイーゼルで中に入つて来ようとしている黒尽くめを殴りつけ始めた。

僕は少し戸惑いながらも近くにあつた椅子を持ち上げて志乃得さんに加勢する。

「う…………ががああああああああああああ！」

さすがに一人係で殴りつけられた黒尽くめは美術室に入れないと判断したのか、いきなり咆哮をあげて真っ赤に染まつた方のナイフを物凄いスピードで投げつけてきた。

「うわあ！」

ナイフは僕の顔面を横切つて篠崎さんの書いていた絵に突き刺さ

つた。この距離で突き刺さるってどんな腕力だよ。

「がががあああ！」

黒尽くめはナイフを廊下の壁ガンガン打ち付けて、怒り狂つたかの様に走り去つて行つた。

「…………」

そして、数秒の沈黙。

「あー、疲れた……」

志乃得さんはそう言つてその場にへたり込んだ。僕もそれに続く様に床に座り込む。

「アレは何？ 人じやない声上げているしさ。それに多分池田を殺したのアイツだよね。その証拠に片方のナイフが真つ赤だつた。しかも、人をナイフで突き刺す事にまったく躊躇が無い。きっとここでワタシが椅子をぶん投げてなかつたら三人のうち誰かが指されてたわ、まったく危ないつたりやありやしない。しかも携帯が繋がらないつて、篠崎とか言う奴と、名探偵さん殺されるんじやないの？」

こんな状況でマシンガントークは健在かよ。

「いや、篠崎さんはどうか分かりませんけど先輩はきっと大丈夫ですよ。あの人はああ見えて何度も修羅場を潜りぬけているはずですから……」

そうさ、先輩は簡単に死ぬ人じやないし、死んでも大丈夫な人間……いや、死ねないつて言つたほうが正しいのか。

僕の言葉に緊張感が一気に外れたのか志乃得さんは噴出した。「ははは、そうだね。名探偵がナイフを持った奴程度に殺される程弱い訳ないもの。てか、そう言つ風に言つて事は道さんつてなかの武道派なの？」

まあ、けつして強くないつて訳ではないよな。

「まあ、強いんじやないですか？」

「適当な考え方だね。まあいいや、そんな事より佐井さん。この学校の放送室つて何処？」

「え？」

光さんは思いも寄らないタイミングで話しかけられた所為か途轍もなく焦っていた。

志乃得さんはもう一度質問を繰り返す。

「だから、この学校の放送室つて何処つて聞いてるの。携帯が繋がらないんじゃ篠崎さんと道さんに変な奴がうろついてるつて伝えられないじゃん。でも構内放送でその事を伝えればワザワザ一人を探し出して伝える必要は全く無い。まあ、あの黒尽くめの男が放送室の場所を知つていたらちょいと厄介だけど」

なるほどね。たしかにその方がさっさと伝える事が出来る。

僕はそう納得しながらも、一つ引っ掛かる事を志乃得さんに質問した。

「志乃得さん

「ん、なんだい少年？」

「確かに放送室でこの事を伝える事は正しい判断だと思います、でも、何であの黒尽くめの奴が男つて断定できるんですか？顔に仮面をつけて全身は黒いマントみたいなもので覆われていたんですけど？」

すると志乃得さんは首を傾げた。

「え、だつてアイツの叫び声からして明らかに男の声だよ？それにはアレ！」

そう言つて志乃得さんは篠崎さんの絵に突き刺さったナイフに指を刺した。

「あんな距離までナイフを飛ばして尚且つあんな綺麗に突き刺さる程の力らあるつて普通は男の人じゃない？」

「……たしかに」

納得だ、普通に考えて女人があんな距離までナイフを飛ばし、そしてそれが突き刺さる程の力で投げられる訳がない。それに声は男性特有の低さがあつた気がする。

「あのー、光さん。今学校に僕達以外で居る人っていますか？」

すると、光さんは少し考えてから答えた。

「えーと、多分学校を開けてくれた教頭先生と業務の人気が一、三人程だと思いますけど」

「その内、この美術室に来た人はいますか？」

「え……たぶん居ないと思いますけど」

「そうですか」

と、言う事は普通に考えてあの黒尽くめの男は篠崎さんって考えるのが筋つてもんだ。

「あ、でも。わたし達が来る前に業務の人人が何人かこの美術室に着たかも知れません」

「え？」

じゃあ業務の人が犯人つてパターンもあるなあ。たしか昨日の時点で先輩の絵はここに届いていたはずだし。

いや、僕が考えた所でたかが知れているな。この情報を先輩に伝えてこの事件をさっさと解決してもらうのが一番の近道だ。

「少年、なんでそんなどうでも良い事を聞くの？」

志乃得さんが、不審そうに此方を見ている。

「いや、ただ何と無くですよ。どんな情報で犯人が割り出せるか分かつたものじゃないですか」

「ふーん、まあ良いや。ところで佐井さん、いい加減に放送室の場所を教えて欲しいのだけど」

「あ、はい。放送室は三階で丁度この美術室の真上です。でも放送をするのなら二階にある職員室の方が近いのでそちらに向かった方が私的に良いかと」

「職員室ね、それならこここの教頭とやらにも会えると思うから丁度良いわ。職員室の場所は良く分からぬから佐井さん、ワタシをつれて行つてくれない？」

光さんは少し間を置いてから躊躇いがちに首を縦に振った。

「よし、決まり。で、アンタたち一人はどうする？ ついてく、それともここに残る？」

安全を考えるのならばついていくべきだ。でも
僕は美奈を見た。美奈は未だに混乱しているらしくずっと泣きじ
やくつっている。

もし黒死くろめの男に出会ってしまい逃げる事になつたり「ん
な状態美奈を連れて逃げきる自身は僕には無い。それにもし何かの
拍子で逸れてしまつたら僕は確実に冷静じゃなくなるだろう。

「僕達は残ります。こんな状態の美奈を連れて歩くなんて僕には出
来ない」

それにここで居ればいざれ先輩が戻つてくるはずだ……たぶん。
「わかった、取り敢えず放送が終わつたらここにもどつてくるわ。
もし、帰つてきて一人が居なかつたら黒死くろめの男に襲われたつて
判断して、校内を探し回るからね」

「分かりました」

「じゃ、行きましょう佐井さん

「はい」

そう言つて一人は美術室から出て行つた。

美術室に残つたのは僕と美奈、一人だけ。

僕は床から立ち上がり立つたままずつと泣いている美奈に寄り添
つて、近くの椅子に座らせた。ついでも僕も近くの椅子に座る。
さて、後は先輩が帰つてくるまでに黒死くろめの男がここに来ない
事を祈るだけだ。帰つてくると言えばたしか篠崎さんは携帯を取り
に行つただけなんだよなあ。だったら明らかに時間が掛かりすぎだ
し、やっぱり篠崎さんが怪しい所。

「ま、なるよーになるか

「……縁」

「ん?」

名前を呼ばれたので美奈方を見ると彼女は弱弱しい顔で此方を見
ていた。まだ目が潤んでいる。

きっとあんな死体を見たから途轍もなくショックなのだろう。よ
く考えてみれば僕達はまだ十五歳。そんな歳で死体を見る人なんて

余りいらないだろうし、しかもあんな滅多刺しにされている死体なんて普通の人ではお目に掛かれないだろう。

「……僕は一度目だけど。

「……縁は、怖くないの？」

「なにが？」

分かつてているはずなのに、ワザワザ質問で返す僕はとても意地悪かも知れない。

美奈はぶるぶる震えながら美術室の扉の方を見る。

「あんな……し、死体とか見て」

「大丈夫、ではないな。僕だって怖いけど、男の僕が焦つても回りを不安がらせるだけだからね。せめて平常心でいる様に見せかけているだけだよ」

理性と言つたつた一枚の皮で平常心を装つてゐる。理性なんて實際はもういし簡単に壊れてしまつ。結局人間は本能には勝てないって事か。

「平常心に見せかけているだけでも凄いわよ、これでもおかげ様で少し安心しているのよ？」

「それを聞いて逆に僕が安心したよ」

「でも……もしあたしが襲われたら助けてくれる？」

「…………！」

びっくりした。

美奈にしてはありえないレベルの質問だつたから。僕は真剣に考える。

果たして自分の命と美奈の命どちらが大切なのか。

「後者でありたいなあ」

「どうしたの？ そんな真剣な顔して」

「え？ ああ、なんでもない」

「結局、助けてくれるのくれないの？」

「助けるよ。たぶん」

「……多分ね、まあ、多分でも縁に助けてくれるって言つてくれる

んだから縁はやさしいよね

やさしいのか？ 僕が。

よくよく考えてみると、僕は回りからやさしいなんて言葉は美奈以外一度も言われた事がない気がする。僕は誰か犠牲にして自分が助かるのならば平氣で人を裏切る人だし、嘘や出任せはよくするし。どっちかと言えば最低に部類される人間だと思つ。

「そう言つ風に言える美奈がやさしいだけだよ」

「え？」

予想外の返答だったのか、美奈の顔を真つ赤に熱したトマトの様になつた。

「あ、悪い。なんか変な事言つた？」

「う、ううん。その逆、ちょっとうれしかつた」

俯き加減でそう言つ美奈は目眩を起こすレベルに可愛かつた。
まったく、そんな事を言われてしまつたら思わず守つてしまつたくなるぜ。

「やつぱりこつゆう所が縁のやさしい所だね」

「あのなあ美奈。僕は決して良い人なんかじゃないぞ？」

美奈は即動する。

「うん、縁は良い人じゃないね、やさしいけど

「どういうことだ？ それ……」

やさしいけど、良い人では無いつて矛盾している様な気がする。
美奈は僕に目を合わせて説明を始めた。

「用はアレだよ。やさしい人つて言つのは、言葉をかけたりして人を励ます様な人、そして人を信じる人の事だよ。良い人つて言つのは、嫌な事をしない人。たとえ、友達が悪い事をしていても注意はしない。つまり人畜無害つてのと同じかな？」

「つまり僕は罵倒を浴びせる人畜有害野郎つて事になるな、それは僕の発言に美奈な困つた顔になる。

「なんで縁はそうやってネガティブなのかなー？ もうちょっとプラスに考えた方が楽だよ？」

「むしろネガティブに考えた方が僕の性に合っている。と言つが、そのほうが楽なんだよ。嫌な事が起きる心構えをしていた方が圧倒的に嫌な事が起きたときのダメージは少ないからな」

もしポジティブに物事を考えられるのならば、僕は時をまき戻す事無く、美奈と共に幸せに生きることが出来たのかも。別に今が幸せじゃないわけじゃないけど、もう少し僕だって欲張りたいんだ。幸せが欲しいんだ。

「ダメージつて、そこまで深刻な悩みでもあつたの縁には？　あるんなら遠慮なく話してよ」

「たしかに悩みの一つ二つはあるけど美奈に話すような事じゃない。それに僕自体元々マイナス思考なのにそんな話をしたくないよ。余計に鬱になる」

先輩が魔法使いで人を狂気にするからどうしようなんて、アホらしくて話せる訳がない。美奈なら信じない事は無いかも知れないと、それで美奈を悩ませてしまつたら僕は美奈の隣いる刺客なんになくなってしまう気がする。ただでさえ少し神経質なのに、変なストレスを与えてしまつたら簡単に壊れてしまいそうで怖い。

「縁……それって　」

「え？」

気付くと美奈の顔が田の前にあつた。

酷く近かつたと思う。それはお互いの吐息が届く距離、鼻と鼻がぶつかるストレスの距離、そして

異性ならば今すぐにでもキスしてしまうような距離だった。

一章 仮面の下の狂氣（2）

異性ならば今すぐにでもキスしてしまつよくな距離だった。

「…………」

僕は黙り込む。

美奈は僕を見つめたまま、言葉を付け足した。

「あたし以外なら相談できる悩み？」

そんな事はない。

むしろ、美奈じやないと相談なんて出来る内容じやない。

でも、

僕は美奈に重荷を背負わせるつもり微塵も無い。

だから黙る。

ただ、黙る。

「…………」

黙つても引かないのならば、攻めるだけだ。

「ずっとそんな距離で見つめるてたらキスするぞ」

普通に考えて、男にこんな事を言われたら引くだろう。引かない訳がない。もし引かないのであればそれは覚悟を決めているかアルコールで酔っているのどちらかだ。

美奈は少しの沈黙の後、僕の目をしつかり見ながら答えた。

「…………してもいいよ」

「うええ！？」

まで、までまで。

目が本気だ。覚悟を決めている。

自分でも想像以上、想定外のカウンターパンチだつた。まさか許可していくなんて全く思っていなかつた。しかも美奈は覚悟を決めているようだ。

じゃあ、僕は覚悟を決めているのか？

今までろくに自分から行動を起こさなかつた。プータローがここで覚悟を決めて残り数センチの空間を埋めるのか、それとも空間を開けて回避するのか。

答えは簡単だ。

出来るわけがない、今の僕では人とキスするなどの強い精神力と行動力は持ち合わせていない。てかすっごく怖い。

「悪いけど、僕からキスを求める自体がナンセンスだ。まあ、コレは完全な黒歴史としてお互い無かつた事にしようぜ」

「…………そんなにあたしとキスするの 嫌？」

「うん、嫌だ」つい反射で逆の事を言つた。殴られた。しかも、グー。僕は椅子から転げ落ち、そのまま床に頭を強打して仰向けに倒れこんだ。本当に幻覚が見えた。「…………ごめん、我慢できずに殴っちゃつたわ」「ああ、別に良いよ…………あはは」コレは利いた……。少なくとも女の子が出せるパンチではなかつたと思う。まつたく反応が出来なかつたし、口から軽く血の味がするのは気のせいだろうか？いや、気のせいであつて欲しい。ふらふらに成りながらも僕は立ち上がり座つていた椅子に戻る。「もう少し手加減してくださいよ美奈さん……頭がガンガンするツス」「失言した縁さんが悪いツス」真似されながら答えられた。取り敢えずは僕たちの交友関係に亀裂が入つた訳ではなさうなので良しそう。そんな事を思つて半ば強引に自分を納得させる。そして美奈から視線を美術室の入り口に移すと丁度そのタイミングで扉が動いた。

「えつ！？」

心臓は恐ろしい速度で加速し、背筋に悪寒が走る。

僕は震えながらも立ち上がつて身構えた。

もし、黒尽くめの男だつたらお終いだ。

田を限界まで見開くような勢いで扉を睨みつけていると、そこから現れたのは長く綺麗な漆黒の髪を靡かせた女性。

少し見蕩れてしまつっていた所為かその女性が先輩と氣付くのに少

し時間が掛かつた。

先輩は先ほどとは裏腹に微笑みながら此方に近づいてきた。

「廊下の死体見たわよ。事件ね？」

「ええ、そうですけど」

「で、他人達は？ もしかして校外に逃げちゃつた？」

「いや、それが……」

僕はその後今までの出来事をサクッと噛み砕いて先輩に説明した。説明を聞き終わつた先輩は何度も肯いて「ふむふむ」と探偵の様な振る舞いをした後テープルの上にドガツとすわり足を組む。

「つまり黒尽くめの男が犯人なのは大体確定つて訳ね、ふふん。面白そうじやない」

相変わらず、探偵しているなあ。この人は。

「それにしてもあの多野田志乃得とか言う女、邪魔ね。たいした実力も無い癖に出しゃばり過ぎだわ」

あー、出た。負けず嫌い。むしろこの人を負かした人間はこの人の殺される様な気がする。

「まあ、良いわ、取り敢えずその放送とやらが終わつたらここにもどつてくるでしょ？ あとは篠崎さんを見つけ出して一人ひとりに事情を聞けばまあ犯人なんてアツサリ特定出来るでしょう、今回は犯人探しと言うより、犯人に殺される前にメンバー全員を集めるつて感じになりそうね」

得意そうに話す先輩に対して僕は美奈が聞こえない様、小声で先輩に話しかけた。

「あのー先輩。一つ質問良いですか？」

「なに？」

「携帯の電波が圏外なのは先輩が魔法で細工したんですか？」

すると先輩はいきなり真剣な顔になつた。

「いや。たしかに圏外にする事は出来るけど私じゃない。単純に電波が悪いだけじゃないの？」

「でも、僕の携帯と美奈の携帯で試したんですよ？ 念のため言つ

ておきますけど、僕と美奈の携帯は違う機種です。どう考へても山奥でも何でもないこの学校の電波状況が悪いって考へるのは少々おかしい気が……」

それを聞いた先輩は喜びを押さえられないのか、最高級の微笑みを僕に見せた。

「さいつこうじやない。良いわ、とても楽しくなってきた。徹底的に叩き潰してやるわよ」

どうやら先輩の名探偵魂に火がついたようだ。

しかし、これってどうなんだ？ 普通にこの学校が圏外になるほど電波状況が悪くなれば誰かが細工した事になる。

「細工をするのなら明らかに計画的な犯行ね。と言う事はこの交流会、元々この事件を起こす事が目的だったのかも」

計画的な犯行、もし仮に先輩の仮説があつているのならば、犯人は一人になるつて可能性が高いなあ。元々反抗を計画していた人プラス先輩が作り上げた殺戮狂気。シャレにならん。

「あのー、さっきから一人とも何を話しているんですか？ 計画的な犯行って」

美奈がもの思ひしげに此方に視線を送つていた。

「犯人はこの交流会を狙つて襲つてきているかも知れないつて事よ。でも大丈夫二人の命は私が責任もつて守るわ」

そんな白々しい事を先輩は余裕の表情で言い放つた。

先輩の売りは事件を解決するスピードだ。決して人を守る事が得意な訳ではない、むしろ先輩は人を破滅させる方が得意そうだし。破滅。

先輩が人を破滅させる事に目覚める前はいつたいどんな人だったんだろう。

僕はふと考へてみる。 美人だからモテたな。 邪な想像しか浮かばなかつた。「野田君、今何か想像したでしょ？」 見透かされていた。「どんな想像か言つて御覧なさいよ」「ああ、いや」 ヤバイ、面倒臭い状況になつた。てか、美奈もそんな得体の知れない

物を見るような目で僕を見ないでくれ、苦しい。

なにか、何か話題を変える話しーそうだ!

「先輩つて好きな人いたのかなー、って唐突に思つたんですね

「え?」

先輩は小さく声を上げて、目を白黒させた。

これが始めて見た先輩に驚き顔だった。

あれ、焦つて適当な質問したけどなんかまづい質問だつたのか?
ちょっと不安になりながら先輩を見ていると先輩は暫く黙り込んだ後、真剣な顔で口を開いた。

「そういうのは自分から言つべきじゃないのかしら?」

「…………」たしかに。

これは少しフェアージやない。

見事なカウンター攻撃だ。

「もしも野田君がこの場で私に好きな人を教えてくれるのならば私もこの場で白状してあげるという条件はどう? それともこの場では言えない?」

僕もフェアージやないが先輩もフェアージやないな。こんな美奈が目の前にいるのにそんな話を出来る訳がないじゃないか。

「どうしたの? やっぱりこの場じやあ恥ずかしくて言えないのかしら?」

人を小ばかにし、見下す態度。まさに先輩そのものだつた。

僕がどうしようか困り果てていると、学校に備え付けてあるスピーカーから放送を知らせるホールのようなものが鳴つた。その後に放送が入る。

『え、えつと。 美術部部長の佐井光です。こ、交流会にご参加の皆さん。び、美術室前でし、死体があります! えつと、殺した人が多分構内を徘徊しているので……気をつけて、ください! えつとえつと。わ、私と多野田さんは、途中で、黒尽くめの男と出会つてしまつたので、今のところは、私一人で行動しています。誰でも良いんで、早く私のところに来てください! お、お願ひです! 怖

いんですよー！」

そこで放送は途切れた。

「 そうとう焦っているわね、佐井さん。もしも黒尽くめの男がこの学校に関わり深い人だったら完全に殺されてしまう」「助けに行くんですか？」

「いや、その必要は無さそうね」

先輩は僕の後ろにある窓に指を指した。

僕が後ろを振り向くと窓から「ロンシ」と鈍い音がした。

「きやー！」

美奈が高い声を上げる。

「冗談だろ……！」

窓。

そしてその外には黒尽くめの男。

ナイフを何度も何度も何度も窓に打ち付けて。窓はドンドンひび割れる。まるで蜘蛛の巣がドンドン完成に近づいていた。

「割られるのは時間の問題みたいだし、わざと逃げるのが吉ね」「こんな状況でよくまあ冷静に状況観察できるもんだ。僕は感心した。

でも今は確実に逃げる事が吉だ。

僕は急いで美奈の手を取り一目散に駆け出した。美奈を置いて逃げる訳には絶対に行かない。僕達からワンテンポ遅れるようにして先輩も走り出す。その後直ぐに後ろからパンツと高く拡散する音が聞こえた。

僕は悪寒を感じて体中に力を込めて今出せる限界の力で走った。

そして本能的に廊下を右に曲がった。曲がった直ぐの所に大きな扉があつたがそれを体当たりに近い感じで開けて中に入る。扉の向こう側はとても途轍もなく広かった。

冷静さを欠いている僕でもそこが直ぐに体育館と言つ事は分かつた。非常口を見つけたのでそこにむかって駆けてゆく。

「 開かない！？」

鍵が掛かっていた。

非常口なのに非常口の役目を果たせないなんて駄目な非常口なんだ。

僕は当たりを見渡す。しかし僕たちが最初に入ってきた体育館の出入り口、そして用具室しか見当たらなかつた。

そこで自分がとんでもない失敗をした事に気づく。

この体育館から脱出できない。

これでは思う壘、やられたい放題、風前の灯。

「馬鹿すぎる」

そう嘆きながらも仕方なく用具室の中に入り込んだ。

用具室の中は想像以上にホコリっぽく体育の授業や部活動で使うもので散乱している。

「くそ、何か身の隠せるものは」

体中から嫌な汗が出る。今僕は確実に恐怖しているのが分かる。最早混乱していると言つても過言ではない恐怖。

「こままじや……」

殺される。

半信半疑のまま突きつけられた現実だつた。

くそ……くそ……くそ！

「……痛いよ。縁」

「えつ」

美奈が喋つたので美奈の方を見ると彼女は顔を歪ませて何かに耐えている様だつた。

ハツとした。

握つた美奈の手を見ると僕は彼女の手を握りつぶすのではないかと思つぐらいに強く握つていたのだ。

「ごめん」

「ううん、必死なのは分かるから」

情けない。これでは僕が美奈を引っ張つた所為で追い詰められた

も同然じやないか。もしその所為で美奈を死なせてしまつたら笑いものも良いところだ。

笑いものになるくらいならば……。

「…………囮」

しかないのか。

でも、僕は 死ぬ覚悟なんて出来ない。

たしかに僕は成績も良いほうではないし、友達も多いわけじゃない。それに家族ともそこまで仲が良いわけでもなく、唯一中が良いのは犬のペットの、ゴンと美奈だけ。それでもそんなんでも、死ぬのは怖い。

だから全力で僕と美奈がお互に生きる道を考える。
僕は全力で用具室を見渡した。

バスケットボール、バレーボール用の支柱、バドミントン用のネット、卓球ラケット、体操用マット、掃除道具が入ったロッカー、演劇部の小道具、得点版、飛び箱 使えそうなのはこれぐらいか。用具室の奥には外へ通じている窓があるけど色んな物が邪魔してたどり着くのに時間が掛かるから却下。

「やっぱり手傷を負わずに行くとすれば『コレしかない』 大して頭が切れる訳でも無い僕にはピッタリだ。

「美奈、この中に入れる？」

「え……」

美奈が戸惑うのも仕方ない。僕が美奈に入るよう指示した場所は飛び箱の中だった。飛び箱は全部で三つあるのだが、その中で一番大きく段数が多い飛び箱なら美奈の小柄な体を入れる事が出来るはず。

僕が飛び箱を慣れないながらも力任せに持ち上げ、少し抵抗しながらも指示通り美奈は飛び箱の中に入り込んだ。

「もし、黒尽くめの男がこの部屋に入つてきても絶対に声を出さないでくれ、そして黒尽くめの男がここから出て行つた後も直ぐに外には出ないで最低六十秒は数えてから外に出る事、良い？」

「……うん

「よし」

取り敢えず後は神に祈るだけか。

「さてと、後は僕だが」

僕は当たりを見渡すが、はつきり言って身の隠せそうな場所は無い。残り二つの跳び箱は小さすぎて僕のサイズには合わないだろう。かと言ってロッカーに入るのはベタすぎる。それに掃除用具がじやま過ぎたぶん身体がはみ出すだろうし。

「得になえな……」

ミステリー小説や推理小説の主人公ならばここにある道具を最大限に使って犯人を撃退する方法を閃くのかも知れないが僕はただのクソガキだ、悪知恵一つ出てこない。

頭のパー加減に呆れないと体育館の方からガラガラと何かを開く音が聞こえた。

きやがつたか。

ドンドンと体育館特有に足音が近くなつたり遠くなつたりしている。じうやら徘徊している様だ。

僕は近くにあつたバドミントンネットを左手に持ち、右手に演劇部の小道具で何に使うか分からぬ長い棒状の物を手に扉の前で身構える。

出来れば来るな。出来れば来るな。

ほとんど念じてゐる様な感じで僕は眉間にシワを寄せて体制を低くし、体中から冷や汗を垂らしながら深呼吸をして、扉を睨みつけていた。

すると足音がドンッと言つて一旦止まる。

「 どうせ来るなら、さつきやがれ」

そう呴いた途端、足音がまた鳴りだす。しかも今度はさつきと違つて意思がしつかり伝わってくる足音だつた。確實に、絶対に、音は此方に向かつて歩いてきている事が扉越しの僕にも伝わつてくる。入ってきた瞬間にネットを投げつけて、それに怯んでいる隙

にこの棒で思いつきり頭を殴る。

いたつてシンプルな作戦。そのシンプルな作戦を僕は馬鹿みたいに何度も何度もシミュレーションをして、備える。

そして、

もう僕と扉を挟んで一メートル無いであろう所で足音は止まつた。心臓の鼓動と恐怖の鼓動がまるでリンクした様な感覚が吐き気を誘う。

「う……うう……」

僕は唸る。

扉は開かない、そこにいるのが分かるのに……。直ぐ目の前にいるのと同じなのに、扉は開かない。

……なんて焦らし上手な奴なんだ。

もう自分から扉を開けて楽になりたい程の重圧。自然と僕は歯軋りを立てていた。と、

扉からガツと音がなつた。

「…………」

扉は開いていない。

扉に手を掛けただけの様だ。もう少しでネットを思いつきり投げつけてしまふ所だつたぜ。

やばいな。相当テンパつている。なんだか不安になつてきた。僕はゴクリッと唾を飲んで深呼吸をする。

……大丈夫だ、僕なら出来る。出来なくともやるんだ。

そう氣を引き締めた瞬間、

扉が 開いた。

二章 仮面の下の狂氣（3）

全力で吼えた

全力で吼えながらネットを投げつける為に思いつきり振りかぶる。その動きを阻害する様に空気抵抗が全身に襲い掛かり体の動きがずつしりとスロー モーションにされた様な感覚に襲われるが、そこから更に歯を食い縛り床を蹴つて重心を移動させつつネットを持っている左腕を振り下ろす。自分の力プラス体重を込めたネットが放物線をえがく事なく目の前の人間に命中した。

殴り付ければ良いだけだ。

そう思つて棒を振り上げた時だつた。

無い声。

はて……僕達と同じくらいの歳で男の人つていただろうか？

「...」あ

右腕を振り下ろしながらその先に居るネットを被つたまま腰を抜かしてに倒れている。人物を見て、僕はようやくその人が誰なのか分かった。

「篠崎さん？」

そう言つたと同時に僕の右腕が完全に振り下ろされ、篠崎さんの体からほんの数センチの所で激しい音を立てながら棒が床に叩きつけられた。

その衝撃で棒が根元からバキッと折れる。

篠崎さんはそれを見て目が飛び出すんじゃないかと言つぐらに目を見開きネットを身体にまとわり付かせたまま立ち上がった。

「アブねえだろうが！ もし当たつていたら骨が折れるぞ！？ いや、それどころじゃない。当たり所が悪ければ死んでいたかもしない！」

大声で怒った事にビックリと言つより篠崎さんがこんなに喋る人なのかと言う事に僕は驚かされてしまった。しかし油断は禁物だ。何せ今の段階では黒尽くめの男候補ではこの人が一番怪しい。

「てか、どうしてアンタらはこんな所にいるんだ？ もしかして光ちゃんの放送と関係があるのか？ たしか美術室の前で死体がどうとか……」

篠崎さんの様子からしてまだ死体は見ていないようだ。しかしそれは少し変な気がする。なんせこの体育館から出て直ぐ左側の廊下を見れば死体は普通見えるし、最初この人が美術室から出て行つた理由は教室に携帯を忘れたからと言う理由。普通に考えて時間が掛かりすぎなうえ、用が済んだら速やかに美術室に戻るはずだ。死体を見ていい訳がない。

「……ありますよ。美術室の前に死体。たしか北口高校の人で志乃得さんの後輩だそうです」

「え、マジかよ」 驚いた顔する篠崎さん。「そう言えば何で篠崎さんはここに居るんですか？」 篠崎さんは間を空けず、得に焦つた様子も見せないで答えた。「いや、アンタらが物凄い速さで体育馆に入つて言つたから、気になつて来ただけだ。まあ来てそういうネット投げつけられるとは思わなかつたけど」「そうですか」 あまり信用は出来ないな。「取り敢えずのその死体とやらの場所に案内してくれよ。論より証拠つて言つだろ？」「わかりました」 果たして今、美奈を飛び箱から出して良いのだろうか？ 篠崎さんはさつきからやたら冗舌だし、なんか妙だ……。

「ふう」

まったく、僕は人を疑い出したらとことん疑つてしまふからな。悪い癖だ。

とりま、姫を連れて行こう、此処に置いていくのは心配すぎる。

僕は少し大きめの声で美奈を呼んだ。

「美奈、もう出てきて良いぞ！」

「一人じゃ出られないわよ！ 手伝いなさいー！」

やれやれ。

僕はノロノロと跳び箱の前まで移動して跳び箱を無理やり持ち上げた。

「……ぐ」

さつきもだけど、どうもこの跳び箱は重くて腰にくる。まだ十代なのに運動不足が身にしみるなあ。

美奈が跳び箱の中から出てきた事を確認して、ドスッと跳び箱を下ろす。

「きや！」 美奈が声を上げた。

なんだろうと思つて美奈を見ると

「は、早く！ 跳び箱を上げて！」

跳び箱を下ろした時に一緒にスカートを挟んでしまった様だった。そのおかげでもう少しで見えるか見えないかの瀬戸際でついつい見入つてしまつ。

「なにボーッとしてるのー？ 早く！」

「あ、すまん」

スカートをグイグイ引っ張る美奈はそっぽを向いていた。そんな美奈を横田に僕はもう一度跳び箱を持ち上げる。と、

「きやあ！」

いきなりスカートが外れた弾みで僕に向かつて圧し掛かる感じで倒れてきた。僕は反射的に跳び箱から手を離して美奈を支える。ガソッと跳び箱が落ちた音が鳴り一步後退しながらも僕は美奈の体を支えきつた。

「大丈夫か？」

「…………ウ…………あ」

「ん？」

美奈は俺に抱かれたまま、得に離れる素振りも見せずにブルブル

震えていた。何処かぶつけたのか？ それにしても静か過ぎる。

「手……が」

「手？」

「触つている」

「え」

……あ。

「い、いやあ、あんまりに無かつたから気がつかなか
「慰めだとしてもその言い方は最低よ！」

そう言われた途端一瞬世界がグラついた。どうやら僕に思いつき
り頭突きをしてきたみたいだ。

「ほんともう最低！ 下の下よ！ そんなんだから縁は友達が少な
いのよ！」

「おい、確かに怒るのは分かるが友達が少ないは余計だ
「事実じゃない！ あたしがいなかつたら一人ぼっちの癖に！」

「悪かつたな。貧困女」

「貧困つて何よ！ 变体！」

「はいはい変体ですよ、ほれ

「きやあ！」

美奈は身体をビクつかせて僕から全力で離れる。

「も……揉んだでしょお！ 变体！ ばかばか！ 死ね！」

美奈にしては珍しく罵倒を重ねてくるなあ。まあ、揉まれたら怒
るか……いや、普通に考えて会話してくれなくなるのかな？ てか
なんでこんなアホな行動しているんだ僕は。

でも、こいつやって美奈にボロクソ言われるのは悪い気がしない。

……マゾか僕は。

「うう……もう……最悪

「あ……」目が潤んでいる。

さすがに泣かれるとヤバイ、篠崎さんもいる事だし変に気まずくなるのは勘弁だ。

と、一瞬思つたが。なんだか美奈が強がりながら泣くなんて事は

滅多にないのでじっくりと観察する事にした。タチが途轍もなく悪い奴だと思う奴は勝手にそう思つていれば良い。

「う……く……く」

鼻をヒクつかせながらも必死に歯を食い縛つて涙を我慢し、此方を睨みつけている。そんな美奈を見て僕は美奈の頭を撫でてやりたくなつたが、今の状態じゃそんな事した所で拒絶されるのが関の山なので観賞だけで我慢した。

「ぐ、くう」

そろそろ我慢の限界かな？ 多分泣き出すぐぞ。

やつぱり泣き出されるのはさすがに困るから謝つた方が良いか。

「わるかつたよ。謝る」

「謝つて済む問題じやないわよー」

あ、泣き出した。

美奈は両目からポロポロと涙を溢しながら激昂した。

「人の胸をワザと触つておいて謝るだけ済むわけが無い！ かつこつけて冷静に見せかけていたつてあたしにはバレバレよ、この変体。胸をさわられた女の気持なんて考えていない癖に！ 縁なんか、大嫌い！」

そう吐き捨てると美奈は用具室から走り去つて言った。

僕はそんな美奈を見ながら一人ポツンッと用具室に佇んで考え込む。

すこし調子に乗りすぎた様だ。あそこまで怒つた美奈は久しづりに見た気がする。本当に怒つているのかも。

「やれやれ」

人間関係と言つ物はフェアーニやないなあ。人間関係を壊すのと直すのでは全く難しさが違う、いくらなんでも直す方が難しすぎだ、どちらも大体同じくらいの難しさになれば良いのに。

僕がそんな絵空事をしながら用具室から出た。すると、

「お前の彼女、物凄いスピードで体育館から出て行つたぞ。なんだか言い合つていたみたいだが、何があったのか？」

篠崎さんが興味津々な様子で聞いてきた。

「いや、くだらない事で少し喧嘩になつたんです。それにアイツは僕の彼女じゃないですよ」

そう、彼女ではない。

ただの幼馴染。

「ふーん、まあ女の子は大切にする事だな。何時何処で色恋沙汰になるか分かつたものじゃないし、好きな人が一人はいた方が人生楽しそうだしな」

なかなか口マンチックな事言つ。たしかに色恋沙汰は嫌いではないけれど、人を好きになつた分だけ苦しむ。これが僕の考えだ。

「てか、殺人事件が一応起きてるんだよな？ 女の子を一人で行かせてしまつて大丈夫なのか？ まだ犯人捕まつていないんだろ？」

「ええ、まあ」

篠崎さんの言うとおりだ。今すぐにでも美奈を追わなくてはまずい。もしも黒尽くめの男にでも出会つてしまつたら美奈の事だ、その場にへたり込んで殺されてしまつ様な気がする。

「暇しねーな」

今の言葉はまさに先輩が好きな言葉だろうな。

僕は美奈を追う為に走り出す ことは、出来なかつた。

「…………」

単独行動をしている時に黒尽くめの男に出会う事に恐怖しているのか、それとも美奈に『大嫌い！』といわれた事が今頃になつてまるでボディーブローの様にジワリジワリと効いてきているのか良くな分からなかつた。

ただ、美奈を追う事が出来なつた。それだけである。

「なあ、どうせあの子を追わないなら俺を死体の場所に案内してくれないか？」

篠崎さんは真剣な顔で僕を見ていた。

……死体は直ぐ近くにあるし、篠崎さんを案内してから美奈を追つても遅くはないよな。

何処からどう見ても、誰がどう見よつとも、明らかに逃げている
考え。

自分でも分かっているさ、最低な事ぐらい。
でも、別に逃げたって良いじゃないか。

死体がある場所まで篠崎さんを案内した僕は余り視界に死体を入れたくなかつたので、廊下の窓から外を見ていた。

「エグイな」

死体の前で篠崎さんは口を押さえる。

たしかにエグイ、普通の精神状態でここまで死体をぐちゃぐちゃ

にする事は普通に考えてありえない。

「これつてここで殺されたんだよな？」

「たぶん、そうだと思いますけど」

篠崎さんは考え込む様な顔をした。

「じゃあ何で美術室にいた人達は何でコイツが殺された時に気付か
なかつたんだ？ こんな風に滅多刺しにして殺される場合、悲鳴ぐ
らい上げるだろ？」

「あ……」

たしかにその通りだ。なんて当たり前の事に気づかなかつたんだ
ろう。

「俺が携帯を取りに教室へ言つた時、死体は無かつた。だから俺が
出て行つた後に殺したんだな。きっと
僕が同意する。

「そうですね…… そななると思います」

篠崎さんが言う通り、篠崎さん本人が犯人で無い限り彼が美術室
から出て行き、その後に光さんと美奈がトイレに行ってから戻るま
での時間に限定される。しかしその短時間で誰にも気付かれず、ま
してや滅多刺しに出来るものだろうか？

僕は考える。

この血の量からして他の場所で殺して死体を移動させる方法は不可能だな。こんな量の血が出ているのならば運ぶ際に確実に血が滴り落ちて何処で殺したのか丸分かりだし、デカイバツクとかに死体を押し込んでも結果は同じだ。

この場で美奈と光さんがトイレから帰つてくるまでの短い時間で尚且つ悲鳴を上げさせずに滅多刺しで殺す。

無理じゃね？

人殺しプロなら分かるが一般の人人がそんな熟練された事を出来る訳がない。と、言う事はこの学校の敷地内に殺し屋でもいるのか？いやでも高校生を殺すために殺し屋まで雇う奴は居ないだろう。それに僕が殺し屋ならワザワザ学校みたいに目立つ場所では殺さない、もつと人気の少ない所でこっそりやる。

「やっぱり計画的に……」

僕は携帯を取り出して時刻を調べた。

十一時三分。

なんだか急に時間の経過が遅くなつたような気がする。

僕は頭を抱えた。

厄日だ。と、

すると、学校のスピーカーから放送を知らせるホールが鳴り響いた。

「お、こんな時に誰だ。また光ちゃんか？」

ふむ、あの様子からして光さんがもう一度放送を掛ける気力があるのだろうか。僕が思うに無理のような気がする。

『えーと、あーあー。これで放送されているのかしら？』

先輩の声だった。

『まあ良いわ、多分大丈夫でしょう。さてこの放送は道絵梨紗、道絵梨紗がお送りいたします』

『ごらんのスポンサーみたいだつた。

『取り敢えず今私は三階の放送室にいるのだけれど、参った事に死体が一つたぶん格好からして業務の人だと思うわ。これも美術

室前の死体と同じく滅多刺し、たぶん同一犯よ。後、誰でも良いからこの学校の校門の扉が開くか調べて置いてね。もし開くのならばそのまま脱出しちゃって結構よ。私がここから校門を見ているから脱出できた人が居たならば放送で皆に伝えるから』先輩は嬉しそうな喋り方で放送を続ける『後、犯人さん。私はここから動かないから是非殺しに来てくださいね、歓迎します。でも、もし校門から脱出来たら私になんか構つている暇無いですよね？　ま、好きな方を選んでください。じゃ、放送ります』

放送が終了しブツンッと言う音がスピーカーから聞こえた。そしてその途端、目の前に死体があるにも関わらず篠崎さんが爆笑しました。

「あつはつはつはつは！　凄いなあお前の先輩。自分の居場所を教えちゃったよ」

確かに凄い、さすが死を恐れないだけある。たぶん上手く犯人を誘導するつもりなのだろう。まさに先輩ならではと言った方法か。『なあ、野田君……だよな。校門の扉が開いているか一緒に確認に行かないか？』

篠崎さんが何食わぬ顔で提案してきた。

「大体今この学校にいる男は君と俺しか居ないんだぜ？　ワザワザ女の子に確認させるのも気が引けるし俺達が行くのが筋つてもんだろ」

たしかに篠崎さんの言つている事は間違つていないとと思う。僕や篠崎さんみたいな男が動かないでどうするんだ。

「分かりました。いきましょう

篠崎さんは指をパチンッと鳴らす。

「そうと決まればさつさと行動だな

そして、外。

僕と篠崎さんは特に問題なく校門の扉の前に来ていた。

「ええっと、これってどうやって開けるんだっけ？」

篠崎さんは上を向いて考え込む。

「たしか……扉の横にボタンみたいな奴があつてそこに鍵を差し込んだら自動で開くんだけ？」

ドアか、じゃあ扉が閉まっている以上開けられないんじゃ……。

篠崎さんは扉の横に取り付けてあるインターホンの様なものに近くづく。

「ああ、やっぱり。ここに鍵を差し込むと扉が自動で開くんだ。今は扉が閉まっているから鍵を取りに行かないと駄目だな」

鍵か、面倒事にならなければ良いけど

「鍵は何処にあるんですか？」

「うーん。多分教頭が持つていると思う。多分教頭は職員室居ると思うが……」篠崎さんは嫌そうな顔をして続ける「さつき光が職員室で放送していた所を考えると教頭は職員室に居ないかも知れないな」

納得だった。普通人が殺されたとかそんな物騒な事件が起きたのならば生徒にそれを知らせる放送をさせる訳がない、教頭自ら放送掛ける筈だ。と言う事は職員室に教頭が居ない可能性は大か。

「あのー、ここ以外に構内から出る所は無いんですか？」「

「ああ、ここから間逆方向の場所にも同じ扉があるんだ。結局あそこも鍵が必要だから何も変わらないよ」

なんだ この学校、時を戻す前に来た時は考へていなかつたけど、まるで他者の侵入を拒む様な作りじゃないか。

僕が思つてゐる事を読み取つたかの様に篠崎さんが説明を始める。

「たしか、二十年ぐらい前に何処かのイカレタ奴がこの高校で何人も殺傷する事件が起きたんだよ。それがきっかけでこんな面倒臭い扉が作られたらしいぞ。あと、窓も全部強化ガラスになつていたはず……」

「そうなんですか？」

黒尽くめの男が窓ガラスを叩き割つて美術室に侵入して來た時、

ナイフを使っているのにも関わらずガラスを割るのに少し時間が掛かっていたのは強化ガラスが原因か。

「取り敢えず職員室に行つてみようぜ。教頭が居ないとは限らない

あ

篠崎さんが口を開けてポカーンと上を見上げる。

「どうしたんですか？」

「あれ

篠崎さんが指をさす。

僕は素直に指が指された方向を見た。場所は三階、美術室の真上の部屋、放送室。

「…………」

僕は思わず言葉を失った。たぶん篠崎さんもそうだつただろう。放送室には先輩そして 黒尽くめの男が居た。

と、言う事は。黒尽くめの男は 篠崎さんじゃ無いのか？

僕は疑問を浮かべながら放送室を見る。

一人は対峙して此方には気付いていない様だ。先輩が丸腰で立ちっているのに対し、黒尽くめの男の方はナイフを前に出して構えている。

「くそ！」

そう言つて篠崎さんは走りだした。

「ちょ、何処へ行くんですか！？」

僕が叫ぶと篠崎さんは走りながら答えた。

「すまん、俺は彼女を助けに行く！ 野田君は職員室に向かって教頭を探し出してくれ！」

「え、」

篠崎さんは一方的に仕事を僕に押し付けて校舎内へと走りさつて言った。

「…………あー」

どうしたものだろうか、一先ず言われた通り職員室に向かつても良いのだが、どうも嫌な予感がする。

僕はもう一度三階にある放送室を見上げた。

未だに先輩と黒尽くめの男は対峙したまま動かない。良く見ると先輩の口が動いている様にも見える事から何かを話しているのかも。でも篠崎さんがあそこに加わった所で大して何も変わらないだろう、きっと先輩は黒尽くめの男を撥ね退けるだろうし、仮にやられたとしてもあの人は不滅。ただこの次元から居なくなるだけだ。

まあ正直言つと、僕にとつて先輩は消えて貰つた方がありがたい。

「…………」

人に消えて欲しいと平氣で考えてしまう僕は果たして大丈夫なのだろうかと時々不安になる。こんな状況を続けているとやはり僕も先輩みたいになるのかと、平氣で人を殺せる奴になつてしまふのではないかと。

いや、無いな。僕は今のところ人を殺したいと思うほど人を憎んだ事は無いし、人を殺す甲斐性もない。甲斐性無しだから。

「だから甲斐性なしでも出来る行動をしようじゃないか」

今僕が出来る最善の行動、それはこの学校から脱出できるようにする事だな。幸い黒尽くめの男は放送室に居るのだし得に心配する事無く職員室へ向かえる。後は職員室に教頭が居ればそれで鍵を貰い。ここを開通させて終わり。なんだけど、そんな上手く行くとも思えない。と言つた僕の経験上の考えだけど上手く行くはずがないんだ。

「でも、まあ、結局」行ってみないと分からぬいか。

僕はそう呟いて職員室に向かつて走り出した。

一章 仮面の下の狂氣（4）

たしか光さんの話に寄れば職員室は一階だったよなあ。

そう、思いながら僕は小走りで一階をウロウロしていた。一階はほぼ一年生の教室で構成されている様で何処もかしこも教室だらけ、今のところ一年生の教室を見た記憶は無いから大きな学校なんだなあと納得する。

やはり僕も男なので大きい学校だから可愛い女の子も沢山いるのだろう。とかついつい考えてしまう、もし仮に僕がこの学校に入学していたら男女問わずもう少し友達を多く持てたかも知れない。

「なに考えているんだよ、僕」

僕は既に一度やり直しているじゃないか、おかげで美奈と一緒に居られる。それだけで十分だ……その肝心な美奈と今は喧嘩中とは滑稽極まりないが。

自分のアホ加減に呆れながらも当たりを見回しつつ小走りで職員室を探す。

「 ん？」

と、あるものに目が留まった。

演劇部部室。

見た目はただの部室だ。だが

扉に鍵が掛かっていないどころか扉が開きっぱなしになっていた。「これは……なんだ？」たしか光さんが言つていたけど学校は交流会に参加したメンバーと業務の人、教頭しか居ないはずなのに全く関係ない演劇部の部室が開いていると言つのは不自然。

「誰か居るのかー？」

そんな事を言いながら僕は部室の中に入っていた。どうも何か引っ掛かるような気がしたのだ。

「……ふむ」

どうやら中には誰も居なかつた。が、

「なるほどね」

だが、明らかに人がいた形跡を発見した。

演劇部の部室には大量の黒いマントと般若のお面が道具箱のような所に入っていたのだ。

つまり黒尽くめの男はこの演劇部からあのお面とマントを調達し、僕達に誰だか分からないようにした。

現地調達とはやつてくれる。

僕は回りを見渡す。

後は特になにもなさそうだな。

そう判断して廊下に出た。確かに右方向から来たから方向に向って探せば良いんだよな？

自分の記憶を頼りにもう一度職員室搜索を開始する。

それにも見つからないなあ職員室、きっとこの学校に入学した人達の中では迷う人とかもいるんだろうな。

こんな状況において途轍もなくどうでも良い事を考えながら搜索を続ける。

「そろそろ見つかっても　おっ！」

一階を探索する事約数分、思ったよりも時間が掛かつたがあつさりと職員室に到着した。後は教頭が居る事を祈るだけだ。もしかすると光さんも居るかも知れない。

僕は職員室の扉前に立つ。何も危険が無いと分かつていても扉を開けるには結構な勇気が必要だった。

僕は扉に手を掛ける。そして一回ほど深呼吸をした。

「　よしつ！」

そして覚悟を決め、扉に掛けた手を横に引いた。

ガラガラと音を立てながら職員室の中が徐々に見えてくる、半分程扉を開けた所で急にゾクリと鳥肌が立つた。

扉の向こうに黒い何かが見えた気がした。

「……………」

「……………」

般若の仮面に黒尽くめ、そして右手赤く染まつたナイフ。そいつの足元に倒れている白髪で五十過ぎに見える男性。ピクとも動かない。

黒尽くめの男。

彼は身構える事もせずただ此方に視線を向けていた。
僕は予期せぬ事態に完全に混乱していた。

いつの間に此処に来た？

その疑問だけが頭にグルグル回る。

そして黒尽くめの男の左手には

鍵らしきものが握られていた。

……マジかよ。

「その手に持つていいのって校門の扉の鍵？」

僕は焦りの余り唐突に質問をしていた。

黒尽くめの男に、

焦り放題の僕に対し黒尽くめの男はじっと此方を見ている。
「い、いや気になったから聞いただけだよ……余り気にしないでくれ

れ」と彼は首の骨鳴らして僕に近づいてきた。

「え……な、なんですか？」

ビクビクしながら僕はその場にじうじか踏み止まつていると黒尽くめの男が鍵を持っている左手を前に差し出した。

「…………くれるのか？」

恐る恐る聞いてみると黒尽くめの男は「クリツ」と肯いた。

……やけに素直だ、それにいきなり襲つてこない事も妙。

僕は細心の注意を払いながら黒尽くめの男が持つている鍵に手を伸ばした。と

鍵の変わりにナイフが僕の顔田掛けて飛んできた。

「…………！」

僕は体を仰け反らす様にしてナイフを交わす。

やつぱり話が上手すぎると思った。

僕は急いで振り返り、黒尻くめの男に背を向けるよひにして走り出す。

こんな近距離から逃げ切れるだろ？か、それに僕はどいつちかと言ふと足が遅い、下手すれば追いつかれて滅多刺しのミンチみたいな死体にされてしまつ。

体中に感じるゾワゾワした感覚に苦しみながらも、全力で職員室から飛び出した。それと同時に僕の頬を掠める様にして尖った物が飛んでゆく。

それに気を取られてしまい僕は何もない無い平らな床に転んでしまつた。

急いで体を上げて正面を見る。正面の壁には真っ赤なナイフが突き刺さつていた。どうやら黒尻くめの男が僕に向かつて投げた様だ。
……下手すれば頭に命中して大怪我だつた。

冷や汗を流しながら僕は立ち上がり後ろを見る、黒尻くめの男は此方に早歩きで近づいて来ていた。

やべえ急いで逃げなきや！

あたふたしつつ黒尻くめの男を視界に入れながら立ち上がる。と

氣付いた。

奴が丸腰である事に。

右手で握っていたナイフは既に投げて無い、左手には校門の鍵。普通に考えて右手が開いているのならば今持っている凶器を右手に握るはずだ。だが事実右手には何も握られていない、つまりアイツの武器は壁に突き刺さつているナイフのみ。

上手く立ち回ればアイツから鍵が奪えるかも。

「 僕にしては、随分でしゃばつた考えだな」

そう言って僕体を翻した。

体制を低くし、全速前進。黒尻くめの男に腰に抱きつくなつた形

でタックルをかました。

それにより僕が上に重なる様にして黒尽くめの男が倒れこむ。僕は奴が握っている鍵に向かつて強引に手を伸ばす。

しかし奴はなかなか暴れるものだから鍵を上手くつかめない。くそ、もう少しだ、もう少しで、『届く！

そして、僕が左手に握られている鍵に触れた瞬間、

「　「うつ！？」

わき腹に蹴りを入れられた。

メキメキッと足がわき腹に食い込んでいく様な感覚と同時に痛みが走る。その衝撃により僕は横に吹っ飛んだ。

いつてえ、こりや普通の人の蹴りじやないな、骨にヒビが入つていなければ良いが。

僕はわき腹を押さえながら立ち上がると黒尽くめの男はすでに立ち上がりつており壁に突き刺さったナイフへ向かつて走っていた。

ナイフを取られたチャンスが水の泡だ。

わき腹の痛みをやせ我慢しながら、僕は黒尽くめの男に後ろから抱きつくような形で動きを止めた。

このまま無理やり床に倒してやれば！

自分の両腕に最大限の力を注ぎ込む。そして、横倒しになるよう相手の重心を横に移動させようとした時　予想外の出来事が起きた。

「きやあ！？」

……えつ？

高めの叫び声、僕でも抑えられるような華奢な体、そして手の平に残る様な不思議な柔らかさ。

女？

僕は動搖し腕の力を弱めてしまう。

「んがつ！？」

その隙の黒尽くめは僕の顔に容赦なく肘打ちを浴びせた。肘は鼻に命中して僕はたまらず黒尽くめから離れる。

鼻を押さえて一、三歩後退している内に黒尽くめは壁に刺さっていたナイフと共に僕の視界から姿を消していた。

……畜生、逃がした。

悔しく思いながら指先で鼻をゆっくり触る 变な方向に曲がったかも知れない。そしてYシャツを見るとシャツは真っ赤に染まつていた。どうやら鼻血が出ている様だ。

「ティッシュと冷やすものが必要だな」

今は血を止めなければ、職員室に行けば、それぐらいはあるだろう。フラフラと覚束無い足取りで職員室に入る、職員室の奥には殺された教頭と見られる人物がうつ伏せで倒れており、それ以外の人間は多分ここには居ないであろう。まあ、すでに死んでいる人間を人間と呼ぶのは少し変な気もするが。

職員室をキヨロキヨロ見渡していたらティッシュはアッサリと発見した。ティッシュ箱ごと頂いてその内一枚を丸めて鼻に突っ込む、やはり鼻が少し曲がっているようで軽い痛みが走った。

そう言えばティッシュを鼻に突っ込んで鼻血を止めるのは余り良くないと聞いた事があるなあ。でもこの方法以外でどうやって止めるのだろうか？

そんな事を考えながら鼻を冷やせる物を探す。

「あれ？ 職員室だから冷蔵庫ぐらいあるよなあ」

むしろ大きい学校だから一つはあると見ていたのだが……考えが浅墓だつたか。

ティッシュ箱を片手に職員室を徘徊する事約一分、僕はようやく冷蔵庫を発見した。冷蔵庫と言つてもあまり物が入らなさそつない二冷蔵庫だ。

「保冷剤でも入っていれば良いが
僕はガチャリと冷蔵庫を開けた。

「…………」

冷蔵庫には五〇〇コーコーラが一本だけ入っていた。
コーラか、嫌いではないけれど、どうせならば缶コーヒーとかが

良かつたな。でも「コーラしか無さそだだから遠慮なく使わせてもらおう。

僕は冷蔵庫から「コーラを取り出し、鼻にヒタリッと当てた。ふむ、なかなか冷たい。

左手で鼻に「コーラを当て、右手にティッシュ箱を持つと言ついたつてマヌケな格好で次に僕は教頭らしきうつ伏せで倒れている男の人に近づいた。

「生きてますかー？」

ティッシュ箱で頭突いてみる。もちろん反応は無い。

そう言えばこの死体なんか変だなーと思つていたけど、じっくり見てやつと気付いた。この死体、美術室の死体とちがつて滅多刺しにされてない、それどころか刺傷一つ無い。

首の辺りに細い跡があるから首でも絞められたのだろうか？ でも黒尽くめの手には血に染まつたナイフが握られていた。わざわざナイフを持っているのに首を絞めて殺すような回りくどい事はしないだろう。それとも叫ばれたりされない為に首を絞めたのか？ それにあの黒尽くめ、明らかに女の人だった。僕みたいな貧弱な奴でも押さえ込む事は出来たし、体も華奢でそこまで脅威は感じなかつた。しかも大切な所は美奈より圧倒的に豊かだつたし。

「いかん、いかん」

こんな事を考えていたら何時まで立つても美奈と仲直り出来ない。

今は、美奈と合流する事が一番に考えた方が良いかもな。

「でも……何処にいるか分からぬしなあ」

せめて先輩らへんと合流していれば良いが、先輩は悪い人間だが確実に犯人では無いし、僕がまだ飽きられていない所を見ると美奈に危険は及ばないはずだし。

「いや、人の事より、まず自分の事を考えるだろ普通」

しかし、僕も変になつたものだ。直ぐ目の前に死体があるので冷静すぎる。死体を見る事自体にはなれないけれど、死体を見てある程度平常心を保てるようになつたらしい。

平常心。この言葉は一番似合つのは先輩かな？ はつきり言って
あの人気が切羽詰つて焦る所など想像が出来ない。そう言えれば志乃得
さんもなかなか冷静だよな。先輩程では無いけれど、この状況を樂
しんでいるようだし。

僕みたいな人間はビクビクしながら何とか生き残る事を考えるだけ精一杯なのに。

教頭から視線をはずして顔を上げる。そして立ち上がりそのまま職員室から出ようとした時あるものが目に留まった。

「……生徒使用禁止、か」

壁に取り付けられている箱状の物にそれは書かれていた。良く見ると取つ手ついている。

ま、使用禁止と書かれているのならば使用してしまうのが人間と言つ生き物だ、それに僕の知り合いで『決まり』とは破る為にあるんだよ』と言つていた人も居るから問題は無いだろう。

僕は得に躊躇う事なく取つ手にティッシュ箱を持った手の小指を掛けでは中を確認した。

「やつぱりね

中には大量の鍵 講義室、被服室、実験室、調理室、情報処理室、視聴覚室その他諸々。

どうりで生徒使用禁止な訳だ。生徒に自由に鍵を使われたら溜まつたものじゃないからな。けど僕はこここの生徒じゃないし。好きに使わせてもらおう。

僕は片っ端から使えそうな鍵をポケットに入れまくつた。鍵の一つ一つには確りと使える部屋の名前がタグで付いているのでどれがどの鍵か分からなくなる事は無い。

そして、鍵を一通りポケットに入れ終わり。

「ふむ、一先ず今はもうここに用は無いな」

しかし、特にコレと書いて行きたい場所も無いなあ。確實に誰かには黒尽くめは校門の鍵を持っている事を伝えなくちゃいけないけど、変に動いて黒尽くめとエンカウンターするのはごめんだ。そう考

えるとここに留まるといつも一つの手かもしない。まあ死体がある場所に留まると言つのは余り気が進まないが……。

でも鼻血が止まるまではここに居よう。個人的にこんな格好で学校を歩きまわりたくない。何処かに座つて休んでいるのが良いかな。そう思つて座り心地が良さそうな椅子を探す。どうも教師達が使つてゐる職員椅子は座る気になれない。いや、職員室にすわり心地が良いイスを求める時点で少し酷か。

そう思い渋々職員イスに座ろうとした時、ある部屋を発見した。

「校長室か」

校長室 どうやらこの学校の職員室は校長室と繋がつているタイプらしい。僕の通つてゐる西高は職員室と校長室が全く別の場所にあるからな。

今はそんな話よりも校長室の中にあるものが重要だ。校長室ならば確実に校長が座る用の椅子がある、それもそこ等へんの安っぽい椅子とは違う、高級な椅子だ。こんな疲れ気味の状態でそれに座らない訳が無いだろう。

僕はまるで何かに取り付かれたかの用にフランフランと校長室の扉の前まで移動していく。きっと命の危機に何度も面した所為で思考回路が軽く変になっていたのだと思つ。

扉の前で意味も無く深呼吸をする。

そして扉をガチャリッと開けた。すると、

「いやあ！ 来ないで！」

女人の叫び声と同時になにやら重い物体が僕の頭目掛けて飛んできた。

ゴスツと鈍い音が聞こえた後、脳みそが揺れたような感覚が走る。視界がグワングワングとゆれ、それに伴い僕の手からコーラとティッシュ箱が滑り落ちる。

あー、意識が遠のいてやく。

まあ、それも良いかな……ちょっと疲れていたし。

二章 容疑者一名と被害者一名(1)

自分には普通の人間よりも優れた部分が無いと思う。

勉強は平均以下、しつかり勉強したつもりでも勉強していない奴に負ける時がある。運動は団体競技の場合單なる足手まといだし、ましてや友達が少ない僕だ。団体で行動する自体がナンセンスだと思える。特に将来の夢も無いし、やりたい事も特に無い。絵を描く事は好きだけれどそれが直接将来に役に立つとも思えないしね。

僕みたいに人の役にも立てない人間には今の世界は非常に生きにくい世界だと思う。でも、だからと言って世界を変える気分も気力もない。僕はインドア派の行動を起こさない平和主義な人間だし。

平和主義な僕にとって人生最大のミス選択は先輩の口車に乗せられ時を戻してしまった事だろう。たしかに利益もあつたけどそれ以上に問題が増えた。

道絵梨紗と言う魔法使いを完全に舐めていた。

この世には良い魔法使いと悪い魔法使いが居るのだ。僕は悪い魔法使いに出会つた。たつたそれだけの出来事。

先輩を鳥に例えれば僕は食べられる虫、先輩を猫に例えるなら僕は鼠、先輩を人間と例えるなら僕は先輩のペットと言つた所か。

もし、先輩が神様なら僕は何になるのだろう、従わされる天使なのだろうか？ 神様を恐れる天使なんて聞いたことが無いけどね。

大体こんな自分勝手な神様居てたまるかと言う話だ。私利私欲の為に他人を勝手に殺人犯にしてあげてその犯人を自分で突き止め、解決する。

誰が何処からどう見ても確實に神様が悪いだろう。仮に世界が、人間がその神様を捕まえたとしよう、その神様に罪に対する刑を言い渡したとしよう。その刑が死刑だつたとしよう。

結果は無意味だ。

死すら凌駕した神の前で死に匹敵する程度の罪など無意味、終身

刑だとしても神は永遠に生きるからそれも無駄。

神より位が低い人間が神を裁く事なんて出来ない。

所詮法律なんてものは人間を裁く為に作られたものだ、神に対して適用させようって考え自体が酷なのかも知れない。

それは魔法使いと人間の間でも同じ事だと思う。何せ魔法使いも神とまでは行かないが圧倒的に人間を凌駕した存在だ。

だから、

だから、僕が先輩を裁く事は絶対に出来ない。

なんて、鬱な事考えながら僕は体を起こした。

僕はどうやら気絶していたようで、いつの間にやらソファの上で眠つていたみたいだ。

僕はズキリと痛む頭を抑えながら体を起こした。

「あ、起きました？ おはようござります」

「…………えーっと

なんで光さんがここにいるんだ？

「頭の傷、大丈夫ですか？ 私も気が動転していて加減と言う物を全然出来なかつたんです。ごめんなさい」

「…………」

あー、なんとなく話が読めてきたぞ。そうだ、確か僕は校長室に入ろうとして職員室から扉を開けた途端、女の子の悲鳴と共にやら重いものが頭に命中した。みたいな展開だつたよな。

じゃあここは校長室と言う訳か。

光さんは僕とテーブルを挟んで向かい合ひ様にすわり俯きながらチラチラと気まずそうに此方を見ている。

「なんか様子が変だぞ。

「どうかしましたか？」

「い、いえ……野田君を殴つたのは私なので、その一、怒つてているのではないかと……」

なるほど、僕を殴つてしまつた事を気にしているのか光さんは、「あ、いや。全然気にしていないですよ。誰でも焦つたらつい思い

切った行動をしてしまうのですから

「でも、殴ったのは事実です……」

「でも、僕は確り生きていますよ、ケガはしましたけど、普通に動けるし全然大丈夫です」

「ほ、本当ですか？ それなら良かつたです」

光さんはホッと安心したのか息を漏らした。

「とんでもなく強く殴つたので死んじゃったかと思つたのですよ。凄く焦りました」

「人はそんな簡単に死ぬ生き物じゃないので、強く殴つても流石に一撃で殺す事はそうとう難しいと思いますけど」

「え、そうなんですか？ 一撃で野田さんが倒れてしまつたのでてつきり殺してしまつたのかと思つちゃいました」

「死にませんよこんな程度じや、気絶はしますけど……ちなみに何で僕を殴つたんですか？」

「え……消火器で」

「…………」

当たり所によつては死んでいたかもしない。てか下手すれば頭蓋骨割れるぞ。

僕はゆつくりと殴られた所に触れてみた、とんでもなく大きいタンコブになつている。

こりや下手すると後が残るかも知れないなあ。おでことかを殴られなかつただけ良かつたけど。あ、そう言えれば鼻血が止まつてゐる。そう思つて僕は自分の鼻に触れてみた。

うむ、なんだか少し曲がつている様な気がするなあ。

心配しつつも僕は話を切り替えた。

「ところで光さんはあの放送を終えてからずつといに隠れていたんですか？」

光さんは「クリと肯ぐ。

「はい、あんな姿の教頭先生を見ちやつたのでなおさら怖くなつてしまつて」

怖くなつたが、まあ確かになれない人が死体を見れば怖いと思うのが普通かも知れない。でも僕の場合は怖いつて概念じゃないんだよな。なんか、やるせない気分になる。

「あのー、さつき職員室と廊下の方向から大きい音が聞こえたのですけどアレつてもしかして野田君ですか？」

多分僕が黒死くめと取つ組み合いをしていた時の音だろうな。

「きっと僕です。ちょっと色々あります」

ここで黒死くめの奴に襲われたなんて言うのはあまり良くなさそうだ。逆に光さんを怖がらせかねない。

しかし、妙だな。光さんの話によると彼女が放送する前には既に教頭が死んでいたって話だ。じゃあ何で僕が職員室に来た時に黒死くめの奴は居たんだ？ 単純に教頭から校門の鍵を回収しに来ただけなのだろうか。それに教頭の殺され方も妙だ。明らかに首を絞められて死んでいる。黒死くめの奴はナイフを持つているのに何でそんな回りぐどい事を……。

でも光さんが嘘をついているって線も否めない。

よく見るところの校長室、職員室からだけではなく廊下からも入れる様になつてている。黒死くめの奴と一戦交えた後、僕は少しの間テッシュと何か鼻を冷やせる物を探して職員室を徘徊していたのだからその間に僕にバレ無いように校長室に侵入する事はそこまで難しい事ではない気がする。

「…………光さん」

「はい、なんですか？」

「もし、僕が此処の教頭先生やあの池田とか言う人を殺した犯人だつたらどうします？」

「え？」

光さんが睡然としながら此方を見ている。

さて、僕のハッタリがどの程度通用するのか試してみようじゃないか。

「たとえば、僕と先輩と志乃得さんが共犯で、光さんと美奈がトイ

レに行つている間にその池田つて人を殺します。三人でやれば滅多刺しになんてあつさり出来ますし返り血を浴びない様にするのも用意さえして置けば案外簡単です。そして光さんと美奈が死体を見た時に僕と志乃得さんがまるで犯人ではない様に見せかける。で、僕たちが美術室にいる間に先輩は素早く職員室に向かつて教頭先生を殺し、そして流れるように三階の放送室で業務の人を一人殺す。どうですか？筋は通つていると思いますけど」

「…………」

光さんはじつと此方を見ている。見た感じ、怖がつてはいる訳では無さそうだ。

これは 軽蔑の目かな？

光さんはゆっくりと口を開いた。

「今の発言が嘘だとしても、限度つて物がありますよ」

「なんだか、僕が犯人じやないって感じの言い方ですね」

「ええ。私……野田君は犯人じやないと思つています」

やけに自信満々な光さんだった。

「だつて、野田君丸腰じやないですか。それに私みたいな人に消火器で殴られて氣絶する様なマヌケさんが犯人な訳ありません！」

意外に酷い事を言う光さんだった。

と言うかなんで僕が丸腰な事を知つてているのだろう？

その疑問を光さんは悟つたかの様に答えた。

「野田君が氣絶している隙にボディーチェックしましたしね」

「え」ボディーチェック？

「ちゃんと下着まで調べました」

しかも下着まで。

「ちょっとまつてください。それつて色々まづくないですか？」

「え、でも私の命の関わる事ですから、まづくなんて無いですよ」

……たしかに。

でも人生初のボディーチェックをした人が女になるとは思わなかつた。結構ショックかも。しかし、光さんは思った以上に用心深い人の様だ。武器として消火器を持っていたり、僕をボディーチエックしたりとなかなか抜け目がない。

「光さんはここから動くつもりは無いんですか？」

光さんは少し間を空けた。

「一人で動くのは怖いですけど、誰かと行動するのならば全然良いですよ。足手まといになるかも知れませんけど」

「じゃあ、一緒に行きませんか？ ここでずっと一人で立てこもつていたら後で疑われる可能もありますし」

すると光さんはニコニコと笑い肯いた。

「そうですね。私も疑われるのは嫌ですから一緒にきます。でも、もし野田君が黒尽くめの男に襲われたとしても私はきっと見捨てて逃げると思いますのでそこだけよろしくお願ひしますね」

「ああ、はい」笑いながら言う台詞じゃないだろう。

ま、光さんが足手まといや僕が襲われていても見捨てる様な人も一緒に行動する価値はあるな。犯人が一人だったとしても、僕が単独ではなく誰かと行動していればそれだけで疑われる可能性は低くなるし、黒尽くめの奴に襲われた際に一手に分かれて逃げる事も出来る。しかも光さんはこの学校の生徒だから校内を案内してもらう事も出来るだろう。だが、もし光さんが犯人ならば殺されるリスクが高くなる。けれどそれは仕方が無い、かな。個人的には一人で行動するよりずっと利口だ。

「じゃあ、行きますか」

僕は立ち上がり、廊下に繋がっている扉の前まで移動した、光さんも僕の後ろに付くように移動する。そして僕がドアノブに手を掛けた時、光さんが喋つた。

「あのー、野田君。一緒に行動するのは良いんですけど、野田君は何処か行きたい場所があるのですか？」

「…………特に無い。が「美奈と合流したいと思つています。

だから危険ですけど校内を探索するつもりですけど、良いですか？

質問に対して、質問で返すと光さんは一回程肯いた。

「分かりました。野田君は小山さんが心配で仕方ないのですね」

「どう、なんでしょうね」

違うとは 言えなかつた。

僕は扉を静かに少しだけ開け、その狭い範囲から頭だけを廊下に出して左右を確認した。近くに黒死病の奴が居ない事を確認し、完全に扉を開く。

「取り敢えず三階から探そうと思つてこいるんですけど良いですか？」

「ええ、構いませんよ」

「じゃあ、三階に行きます。その際に色々な場所の案内も頼みたいんですけど」

「問題無しです」

そう言って光さんは親指を立てた。なるほど、頼もしい。やはりこの生徒と行動を共にするだけで得した気分になれるな。それに光さん自体はなかなか魅力的な人だし。

ルンルン気分、とまでは行かないがいつもよりは気分高らかに、僕は光さんに案内され三階へ向つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167x/>

名探偵魔女

2011年11月26日19時49分発行